

水源地域活性化調査「吉野川流域」の取り組み

食のツーリズム形成を目指して

報告書

平成22年3月

国土交通省 土地・水資源局

水資源部 水源地域対策課

はじめに

水資源開発は、ダム建設等により上流の水源地域に一方的な不利益や不公平感を生じることから、水源地域住民の理解を得ることが不可欠です。このため、下流受益地域が水源地域への理解と協力を進め、ダム貯水池の水質保全・水源林の整備などの水源地域対策を流域一体となって共に行うことが重要となっています。

近年、上下流における流域活動に関心の高い水源地域と下流地域とのそれぞれの行政や行動力のある非営利活動組織（いわゆる NPO）などが互いに連携することについて模索が始まっていますが、一部の住民等の活動に留まっています。今後、流域全体が一体となった水源地域の保全・活性化への取り組みを促進していくことが重要な課題となっています。本調査は、このような状況の中で、上下流の流域活動に関心の高い住民等のみではなく流域活動に関心の高くない層の住民等も流域活動に参加し、上下流全体が一体となり水源地域の保全・活性化を促進するための仕組みづくりについて調査・検討を行ったものです。

水源地域対策課

もくじ

調査概要	3
第1章 本業務の背景と目的	8
第2章 吉野川流域の取り組みの経過と体制	11
第3章 吉野川流域の現状	13
第4章 食のツーリズムの推進	29
第5章 今後の展開	73

調査概要

「水源地域活性化調査」（流域タイプ）は、水源地域を活性化するために、水源地域だけでなく下流地域や受益地域も一体となって取り組んでいく仕組みを検討するための調査である。吉野川流域の取り組みの概況は、以下の通りである。

1. 調査の目的

流域全体が一体となった水源地域の保全・活性化への取り組みを促進していくことが重要な課題となっている中で、吉野川流域では過疎化・高齢化が年々厳しくなることから、町村の枠を越えて産業振興や地域づくり団体を進めている取組を深化させ、流域としての一体化を促進した。本調査の目的を果たし定着させていくためには、流域という広い地域を対象としていることから、概ね3カ年を一つのサイクルと捉えている。平成19年度から取り組んだ本調査は、今年度が最終年度である。

2. 調査の経過

吉野川源流の高知県嶺北地域は、四国の水瓶ともいわれる早明浦ダムを擁している。しかし、高齢化・人口減少に伴う活力低下は相当厳しく、水源地域の活性化は喫緊の課題となっている。このため、長年にわたり地元だけでなく下流受益地域からも、行政や市民活動団体が訪れ、連携を通じた水源地域の活性化に取り組んできた。

■水源地域である嶺北地域の現状の把握

初年度（平成19年度）は、吉野川の水源地域で地域づくりを推進してきた「NPO法人れいほく活性化機構（通称れいほくNPO）」が流域を巻き込んだ地域活性化を推進するには、自分たちで何が出来るかを議論した。この「れいほくNPO」は、地域づくりを住民の力で担っていこうと、平成14年から上下流交流活動や嶺北地域のまちづくり、水源地域の水質調査など様々な活動を行ってきた。しかし、嶺北地域の少ない人口の中でそもそもNPO活動できる人材が限られていることや、その人材も都市部に比べて相対的に高齢者が担い手となっていることから、嶺北地域の住民だけで、あらゆる課題に着手することは困難である。このため、今後の嶺北地域の活性化には、新しい産業形成が必要であるとの認識はあるものの、れいほくNPOとしては率先して行動することが困難となりつつある。このような中、都市部の安全安心な食への関心の高まりを受けて、

嶺北地域では、有機農業に関心を持つ若者たちのために山下一穂氏を中心とした「有機のがっこう土佐自然塾」が始まった。一方、吉野川下流域には、社会全体の環境意識の高まりの中で、「新町川を守る会」のような環境系NPOや「コープ自然派徳島」のような環境配慮型農業を支援する生協活動などが盛んになっていた。これらの団体との話し合いを通じて、下流地域の住民も水源地域の保全と活性化に寄与する必要性について認識を共有することができた。また、これまでの上下流の関わりは、水源林の植樹等が中心だったが、これでは水源地域の活性化になかなか結びつかない。例えば、徳島の祖谷では、アレックス・カーを中心に村松亨氏たちが活動している「ちいおりトラスト」がある。山間の茅葺きの家を保全し、囲炉裏での食文化などを大切にしていることから様々な来訪者が田舎暮らしの体験に訪れている。これらのことから、水源地域の農業に着目し、「食べる」をテーマに上下流を繋げていくことが、流域一体化による水源地域活性化に結びつけやすいとの判断に至った。

そして、平成 20 年度は、具体的に流域を巡り、「食のツーリズム」の具体化に向けた情報収集を行った。

■下流受益地域の率先行動による吉野川流域一体化に向けての戦略の模索

平成 20 年度は、「食のツーリズム」の構想を模索するために、あらためて流域の様々な団体を訪問した。団体探しにあたっては、流域の行政などに紹介を求めたり、団体から関連団体を紹介したりしてもらいながら進めた。これらの団体を訪れ、食という観点で流域を活性化していく取り組みについて意見交換を行った。しかし、団体の多くは、参加が困難であるとの回答となった。理由としては、

- 経営的に関わるのが困難である。
- 未経験のことには参加困難である。
- 衛生管理上、一般の人間が立ち入ることが出来ない など、

実際に関与できる団体探しが続いた。しかし、水源地域の活性化のために組織的に食をテーマとしたツーリズムに参加できる団体はなかなか見つからなかった。これらのことから、広く様々な団体に声を掛けて展開することは、それぞれの組織的判断が必要なため、新しい活動を起こすには、小さくとも個人レベルの判断で参加が可能で、着実に動かすことのできるモデルを構築していくことが必要であると判断した。このため、他の流域で水源地域活性化のプロデュースを行った実績を持つ(株)HAKK Lの波佐本由香氏の協力を得て、吉野川流域における人材の絞り込みとプロジェクトの方向性の整理を行うこととした。

■問題意識を持った個人のネットワーク化による「食のツーリズム」の推進

様々な団体との意見交換の中でも、「食のツーリズム」を通じて水源地域の活性化に起用していくことに積極的だったのは、吉野川下流に暮らし、環境に配慮して漁業を行うことで首都圏などの一流の料理人・シェフなどからカリスマ漁師として評価されている村公一氏だった。これまでの様々な団体との意見交換の結果も踏まえ、今後、個人レベ

ルで同じ問題意識を持って流域で食に関わるなりわいを持つ方々と連携しながら、「食のツーリズム」を推進していくこととした。

■環境（森）から地域経済（食）へのテーマの拡大

これまで上下流の連携のテーマは、水源の森づくりが中心だった。これだけでは、水源地域の経済的活性化に繋がらない。このため、食の安全安心・おいしさをテーマとすることにより、環境だけでなく地域経済につながる動きを誘発する可能性を見出した。

■新たな担い手の発掘

テーマを拡大したことにより、水源地域や流域の活動に関与する新たな主体として「食」に関係する職業の人々の協力を得ることができた。また、吉野川流域には、特定の農産物による産地形成を行っている場所は少なく、各農家が少量多品目で農産物を生産する傾向にあることがわかった。特に源流部の農家には、一般には流通していない地域固有品種の農産物を栽培していることもわかった。一方、首都圏のシェフなどは、農家が農産物をこだわって育てる様子を見る機会も少なく、また地域固有の食材を調理する技術を学ぶ機会が少ないことから、「食のツーリズム」のような機会に参加したいという意向もわかった。

■「食のツーリズム」の具体化への課題

平成 20 年度の情報収集と「食のツーリズム」の検討結果を踏まえ、今後、水源地域の新たな産業振興を図る手法として、以下の検討が必要となった。

- 源流の農家を訪ねるツアーの企画実施
- ツーリズムの促進と農産物販売の融合
- ツアー推進を通じて、旅行事業として継続性を持つことのできる体制構築

現場への観光誘致だけでなく、料理人たちが珍しい農産物を首都圏の消費者に提供するきっかけとなることから、地産外消の促進による水源地域の活性化に結びつけられる。ここで実際の経済的活動を進めることにより、調査終了後も継続的に活動が進められる体制づくりを行う必要がある。

このような課題を踏まえ、平成 21 年度は、実際に食のツーリズムを展開する企画を進めた。

3. 自立的・持続的な活性化活動の仕組みの構築

■「食のツーリズム」の推進体制

平成 19 年度から平成 20 年度に掛けて整理してきた取り組み方向性を踏まえて、あらためて吉野川の流域をフィールドワークしながら、食のツーリズムの具体化に向けた推進体制の整理を行った。

- ❖ 「食のツーリズム」の形成のために、波佐本氏がれいほくNPOを通して、地域資源と食材さがしの絞り込みを行った。
- ❖ 村氏、山下氏、村松氏、波佐本氏らがフィールドワークを行い、生産者との意見交換や食材を確認しながら商売になるクオリティかどうかの評価活動を行った。
- ❖ 高知県にも関わっている奥田シェフへの協力依頼など、東京の料理店で「食」のプロたちを交えた意見交換を行った。(奥田シェフは、毎日放送「情熱大陸」などで山形・庄内野菜を全国に広めたことで有名である。)

■食のツーリズム・ツアー企画

フィールドワークを通じて得られた地域情報は、何度も訪れて繋がりを深めた人間関係を元に、具体的な食のツーリズム・ツアーの企画を検討した。

- ❖ タイトル「吉野川の源流・食の探訪・青空キッチン」
- ❖ テーマ： 「流域の旅」。吉野川源流の環境、源流が育んだ食材、源流が培った暮らしの文化を堪能する。
- ❖ ターゲット： シェフ、料理人、料理教室の生徒など、料理に関心を持つ人々
- ❖ 旅の楽しみのポイント
 - 吉野川河口で漁をしているカリスマ漁師・村公一氏が、食のツアーをコーディネートする。(上下流の繋がり)
 - 東洋文化研究家アレックス・カーが有名にした茅葺き屋根の旧家のまわりで、自分の時間を楽しむ。
 - 農家さんたちとのふれあいを通じて、源流地域で暮らす知恵、農業・酪農へのこだわりを知る。
- ❖ プログラムのハイライト：
 - 自ら畑で食材を探し、自らの料理の技術で地物の食材を楽しむ。

4. プロジェクトの成果・課題と今後の展開

吉野川流域において、平成19年度から21年度にかけて取り組んできた流域が一体となった水源地域の活性化は、流域の起業意識の高い人々によりツアーの事業性を詰める段階まで進めることができた。

- ❖ これまでの吉野川流域の水源地域活性化は、嶺北地域に焦点を当てた取り組みだった。今回の取り組みは、下流域はもとより、中流域(祖谷溪)の人々も参画した活動を進めた。
- ❖ NPOが中心となると、経済的な自律性の弱さがつきまとう。今回の取り組みは、最初から経済活動を目的とし、事業主体として参画できる人材を中心に取り組むことで、調査終了後も、自立的な活動を見込むことができる。
- ❖ 今後の食のツーリズムの発展において、東京や大阪からの交通アプローチを考

えると、高知（海側）もツアーに組み込む必要がある。魅力あるツアー企画とするためには、吉野川流域をクローズアップしつつも、プログラム内容は、より多面的な楽しみを組み込む必要がある。

- ❖ 平成 22 年度には、ツアーのプログラムを実際に事業として進め、徐々に内容を進化させる。

5. 今後の課題 ～さらなる活性化の促進のために～

この 3 カ年のプロジェクトは、行政の直接的関与がほとんど無い中で進めてきた。このため、NPO などの人伝で人材を捜しながら、その人人が自らの出来ることに取り組み、人と人をつなげる活動によって推進した。この流れを、さらに発展させるためには、以下のような課題に取り組んでいく必要がある。

- ❖ 他の元気な流域に比べ、来訪者へのおもてなしのクオリティが弱いため、宿泊関係者向け、販売関係者向けに外部講師を招いた実践的な人材育成が必要である。
- ❖ 地元関係者だけでは広域的な連携による旅行商品企画が立てられず、目の肥えている首都圏には魅力が感じられない。このため、専門家によるモニターツアーの受け入れを通じた継続的な地元ネットワークの形成促進が必要である。（例えば、観光客向けの地域交通の多面的利用の研究など）
- ❖ 嶺北地域と徳島・高松のNPOなどの交流には長い歴史があるものの、吉野川流域のその他地域（特に中流域）の参画が弱いため、吉野川流域全体として首都圏などに発信する力が弱い。今後、上・下流だけでなく、中流域の参画を促す機会が必要である。
- ❖ 地元産品を大都市マーケット（首都圏・アジア）に売り込んでいくために必要な流通経費の支援や削減のための研究費用等の支援が必要である。
- ❖ 吉野川流域内の特産品の情報収集を行ったり、旅行企画商品を誘発したりするための地元の社会起業家への活動支援が必要である。

第1章 本業務の背景と目的

1. 本業務の背景と目的

水源地域では、過疎化と高齢化の進展により水資源を育む水源地域の持続的な地域経営が困難となっており、ひいては良質な水資源の安定的な確保において様々な懸念がもたらされている。このため、流域の誰もが水源地域に経済的・文化的な関与を図ることを通じて、良質な水資源の安定的な確保への寄与を図ることが必要となっている。

水源地域対策においては、流域が一体となって取り組むことが必要である。水源地域や下流受益地域の自立的・自発的な行動が、良質な水資源の安定的な確保に結びつくと考えられる。

このような行動を誘発するには、まず、問題意識を持った人々の率直的な行動が必要となる。そして、活動が持続的に展開するためには、このような活動に必ずしも関心の高くない人々も関与していく仕組みが必要である。

本調査は、上下流活動に関心の高くない層の住民等も流域活動に参加し、上下流全体が一体となり水源地域活性化を促進する仕組みづくりの調査・検討を進めていくために必要なノウハウを集積し、他の流域でも応用できる手法として整理していくことを目的としている。

- ❖ 流域全体を対象に、必ずしも流域活動に関心のない層の住民を巻き込んで、水源地域の自立的・持続的な活性化活動を実施するための仕組みづくりについての調査検討を行ったものである。
- ❖ 本事業は、3カ年を掛けて進めてきた。

2. 調査の進め方

本調査では、以下の考え方により調査の進め方について、概ね3カ年を見通して流域が一体となった水源地域活性化の仕組みを考えていくこととしており、今年度は、その最終年度に位置づけられる。

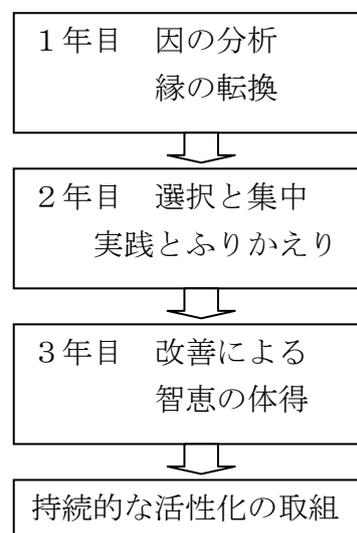
これは、流域というある程度広い地域を対象として本調査の目的を果たし定着させていくためには、概ね3カ年程度の期間を一つのサイクルと捉え、調査を進めることが必要と考えているためである。水源地域の活性化に資する「人材」に焦点を当てている本調査においては、最低限必要な期間と考えている。例えば、ハード事業でも、現状と課題の分析のための調査、構想の立案、計画の立案、実施設計と複数年の段階を経て、建設・供用に至る。水源地域活性化においても、担い手の現状と課題を分析し、当事者が水源地域を活性化していくための戦略を描き、はじめの一步を踏み出すまでにそれ相応の時間が必要となる。

1年目は、当該流域が抱える課題（因の分析）を捉え、閉塞・暗転した状況から好転への転換点（場の改善）を見出すことが中心である。ステークホルダーによる戦略づくりを行い、関わる人々の一人ひとりに動機付けと目標設定を行う。そして、転換をもたらす人材を見出し、他地域から人材を巻き込むコーディネート（縁の転換）に多くの時間が費やす。

2年目は、「選択と集中」による実践に繋げていく。携わった人々が「実践とふりかえり」を繰り返すことにより、リアルタイムで戦略そのものが「深化」をし始める。

3年目は、改善による「持続化」である。この段階を踏むことにより、関わった人々にとって「知識」が「経験」を通じた「智慧」となる。関わった人々が体得した智慧は、本事業終了後も流域一体となった水源地域の自立的・持続的な活動を誘発する原動力となる。

“3年1サイクル”



3. 調査対象流域

対象流域	主な対象地域	立地の特性
吉野川流域	高知県嶺北地域 及び 吉野川流域全体	吉野川は、四国三郎吉野川と言われる大河川である。そこを流れる水は、途中で分水して香川用水として香川県民の生活や産業に欠くべからざる存在となっている。吉野川の源流である嶺北地域では、進行する過疎化と高齢化の中で、自律的な地域づくりを目指して、流域の連携にも取り組むNPOが活動している。



第2章 吉野川流域の取り組みの経過と体制

1. これまでの吉野川流域の水源地域に対する取り組み

これまでの吉野川流域における水源地域活性化調査「吉野川流域」の経緯を整理する。
吉野川（嶺北地域）に対する国（水源地域対策課）からの働きかけは、以下のような経過がある。

①平成6年度 水源地域活性化調査（嶺北地域）を実施した。

②平成10～12年度 上下流交流の促進に関する調査の実施

- ❖ 嶺北地域から下流地域に出かけ、住民同士の交流を開始した。（後に、れいほくNPO発足のきっかけとなる。）
- ❖ その後、「新町川を守る会（徳島）」による「千年の森づくり（大川村）」につながる。

③平成13～15年度 流域連携の促進に関する調査の実施

- ❖ 一連の支援活動を通じて「れいほくNPO」が発足した。
- ❖ 以後、嶺北地域の地域づくりにれいほくNPOが参画している。

④平成19～21年度 流域一体化の促進に関する調査の実施

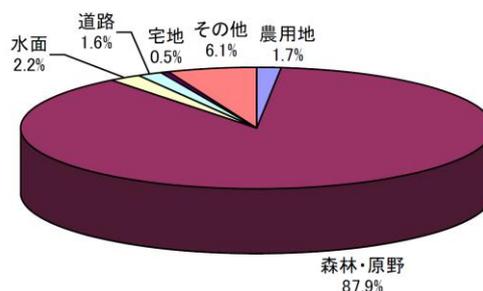
- ❖ 経済的な活性化を図るには、NPO活動では限界がある。新たに地域産業を動かす必要性から、嶺北地域の農家さんと鳴門の漁師さんのコラボレーションの形成を行った。
- ❖ 次年度以降、上記関係者らにより、食のツーリズムの形成を進めてきた。

第3章 吉野川流域の現状

1. 吉野川源流の嶺北地域の概要

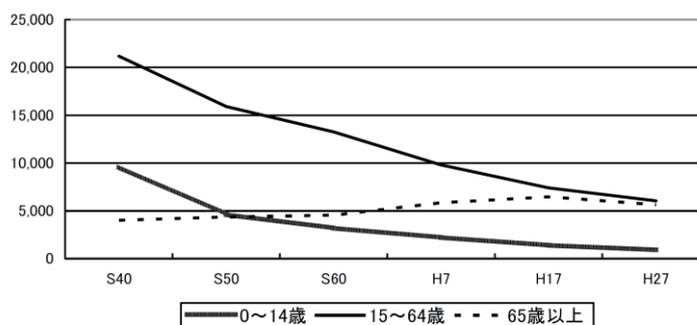
嶺北地域は、吉野川源流地域にあり、その流れは諸処に美しい溪流をなし、西方から東方へと徳島県側に注がれている。地域の北側には四国山地の嶺々が連なり、峻険な山々に囲まれた特異な地形にある。地域の面積は約757平方キロメートルと高知県の10.6%を占めており、標高200m～1,700mの山岳地形である。土地利用状況は地域の87.9%を森林が占め、農用地面積は1.7%、宅地面積はわずかに0.5%と、典型的な山村地域となっている。

嶺北地域の土地利用状況

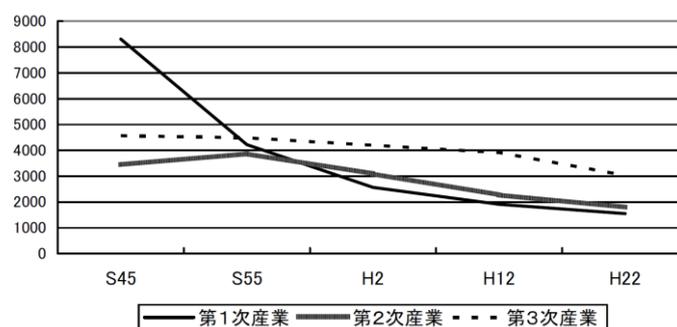


吉野川の源流に位置する高知県嶺北地域は、大豊町、本山町、土佐町、大川村から構成され、四国四県に水が供給されている早明浦ダムを擁している。この水は、吉野川下流の徳島だけでなく、香川県や愛媛県、そして高知県内へと配水されている。このため、下流地域からは様々な上下流交流事業を通じて、嶺北地域と関わってきましたが、一方で、住民の主体性や交流をきっかけとした次の展開にはなかなか結びつかなかった。そのような中で、平成11年に地元住民からの働きかけで、森林について考える全国規模

嶺北地域の年齢階層別人口推移



嶺北地域の産業別就業者数推移



の集いが開催された。その後、嶺北の住民が主体的に地域づくりに取り組む流れをより強固なものとするために、嶺北広域行政事務組合や地域づくりや森づくりに関わる外部

のNPOなどの協力支援を得て、徐々に嶺北住民の主体性を育みつつ、下流地域住民との新たな流域の関係づくりを目指して活動をはじめた。嶺北住民にとって、数年に亘る地域づくりの活動の経験は、やがて自ら地域づくりを行う「れいほくNPO」の組織化につながった。

今、れいほくNPOでは、「れいほく環境わごん」の主催や吉野川流域のNPOとの連携などを通じて、嶺北の地域づくりに取り組んでいる。

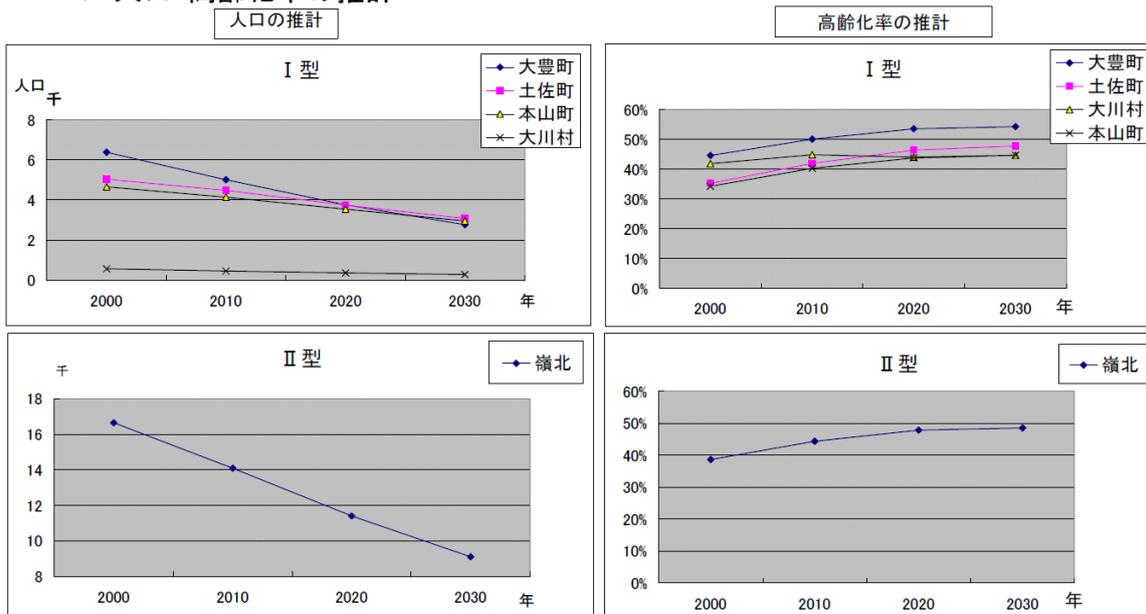
2. 吉野川流域の活性化に関わる現状

水源地域である「嶺北地域」は、年を追って活力の源泉となる人材が減少・高齢化しつつある。嶺北地域で取り組んできたこれまでの水源地域活性化の取り組みを、流域一体化の視点から深化・持続化させていくこととした。

嶺北地域では、木材関係者と下流地域のNPOにより、水源地域木材で家建てる動きは徐々に定着しつつある。また農協を中心とした「れいほく八菜」も徐々に市場から評価されている。一方、これらを担う人々が高齢化する中で、次世代を育成する動きが不十分な状況である。例えば、大豊町の「碁石茶」は途絶えかけたものの、関係者の努力によって後継者が確保され、かろうじて技術が継承されている。一層厳しくなる過疎化・高齢化により、地域づくりを担うために発足した「れいほくNPO」も福祉や環境などの現状を下支えする業務で手一杯となっている。

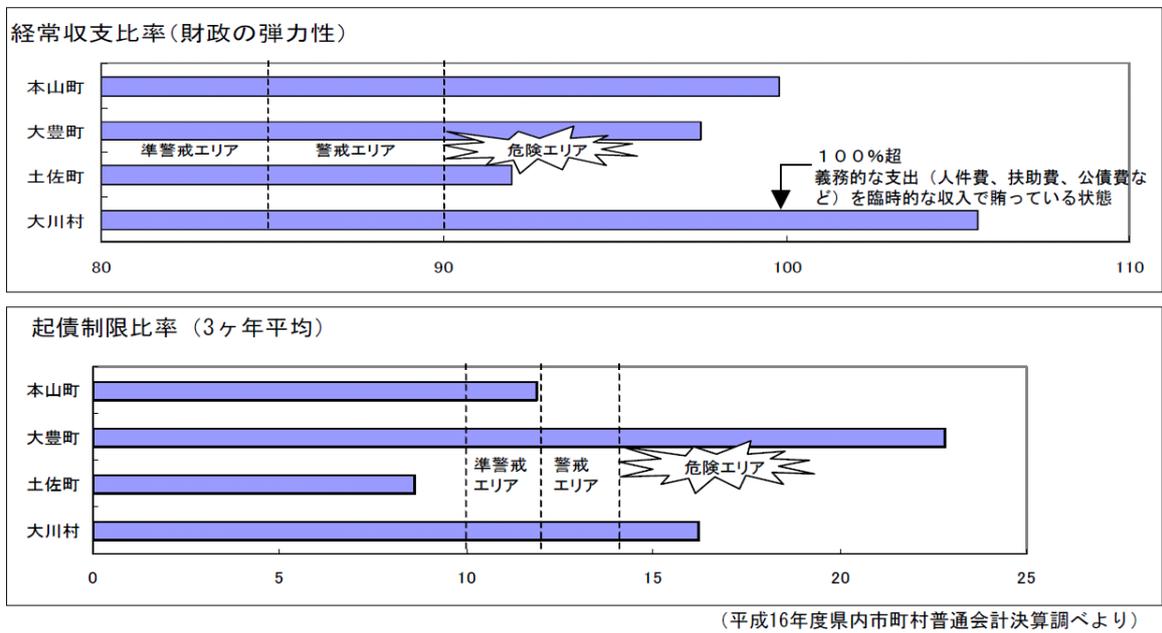


1 人口・高齢化率の推計



吉野川では、他にも様々な団体が上下流交流を進めてきたが、徳島市を中心に活動す

る「新町川を守る会」や香川県が深く関わっている「どんぐり銀行」以外は、民間を中心とした活動は衰退傾向にある。嶺北地域では、素材提供は可能だが、新たな商品開発から流通形成までの体力は、非常に弱い状況となっている。



3. 吉野川と早明浦ダムの概要

吉野川は、古くから利根川の坂東太郎、筑後川の筑紫次郎とならび四国三郎の異名を持つ大河川である。吉野川流域は、四国四県にまたがり、幹線淡路延長は 194 km、流域面積は 3,750 km² (徳島県 63%、香川県 1%、愛媛県 8%、高知県 28%) に及び、四国全域の約 20%を占めています。その源は、高知県土佐郡瓶ヶ森(標高 1,897m)に発し、四国山脈に沿って東に流れ、大歩危、小歩危の奇勝をつくり、銅山川、祖谷川などと合流して徳島県池田町に至る。さらに、流れは岩津から徳島平野に入り、大小の支川を合せながら第十堰地点に達し、旧吉野川を分派して紀伊水道に注いでいる。豊富な水資源を持つ吉野川は、その暴れぶりをみせながらも、下流の徳島ばかりでなく分水によって、香川、愛媛、高知に対しても農業用水あるいは都市用水を供給し、これらの地区の人々の生活に大きな役割を果たしてきた。

しかし、それまでの吉野川の水利用は、局部的であってお互いの関連性も薄く、その水源開発にもおのずから限度があり、この豊富な水資源もほとんどが未開発の状態だった。昭和 36 年 11 月制定の水資源開発促進法及び水資源開発公団法を受けて昭和 41 年 11 月、吉野川が水資源開発水系に指定された。さらに昭和 42 年 3 月に水資源開発基本計画が決定され、早明浦ダム建設事業が本格的に開始した。

早明浦ダムは、吉野川水系における水資源開発の中核をなすもので、ダムに貯留した水を各種既得用水の安定取水に利用するほか、新たに年間 8.63 億 m³ の用水を開発して

四国四県に供給すると共に、有効な落差を利用して電源開発を行うための、有効貯水量 28,900 万 m³、堤高 106.0m のダムである。香川用水は、池田ダムから香川県内に導水し、讃岐平野の農地に対し必要なかんがい用水の補給を行うと共に、香川県の水道用水及び工業用水の供給を行うため、農、上、工の共用水路（最大通水量 15.8m³/分）、延長約 47km を建設したものです。農業用水は約 31,000ha の水田畑地をかんがいし、水道用水は高松市などに供給している。

このように、早明浦ダムは、四国四県に水を給水するなど下流地域の都市にとって重要な水資源を確保するダムである。そのため、四国四県により「吉野川水源地域対策基金」の設立も図りながら、嶺北地域に対し様々な水源地域対策を行ってきている。また、下流地域の行政も、良質で安定的な水資源の確保について、下流地域住民の意識啓発や水源地域に対する理解などを目的として、様々な上下流交流事業を進めてきている。



4. 現状把握と取り組み方向性の設定（平成 19 年度）

プロジェクト立ち上げ当初は、長年にわたり地域活性化に努力してきた嶺北地域住民の取り組み状況の把握からはじまった。

- ❖ 嶺北地域全体を考えた地域づくりの活動組織として「れいほくNPO」が活動を継続しており、徳島や香川などの行政やNPOなどと水源の森づくりなどの流域連携を推進してきた。
- ❖ 嶺北地域の高齢化や人口減少の中で、れいほくNPOの活動にも限界（企画面、即応性、多様な人脈、情報収集など）があり、経済的な活性化を考えるには、下流域や流域外の人材を巻き込んだ活性化策を考えていくことが必要となっていた。
- ❖ 本事業では、れいほく八菜、嶺北赤牛、はちきん地鶏など農業に努力する嶺北地域の可能性を活かし、「食」をテーマとした活性化の方向性を設定した。
- ❖ 吉野川流域全体に目を向け、「食」の視点から、食材探しや人材探しを開始しはじめた。



地域の特産品

特産品	製造場所	販売所
碁石茶	長岡郡大豊町	道の駅大杉・夢工房など
減農薬米	長岡郡本山町	四季菜館(本山町本山) 0887-76-4337 もとやま四季菜館愛宕店(高知市愛宕町2丁目) 088-823-2634 本山さくら市(本山町本山582-2) 0887-76-2252(FAX 兼)
生・干しいたけ		
土佐の赤牛		
焼肉のたれ(甘口)		
しそジュース		
ゆずジュース		
柚の酢(さくら柚子)		

ゆず酢		
さくら味噌		
大川黒牛肉	土佐郡大川村	大川村ふるさと公社(土佐郡大川村朝谷) 0887-84-2201
焼肉のたれ(謝肉祭)		
玉緑茶		
山茶		
アメゴ		
いのしし肉		
カリントウ		
どんぐりせんべい		
キジ肉		
わさび漬け	Aとされいほく本川支所(吾川郡いの町本川) 088-869-2006 遊漁者センター(吾川郡いの町長沢) 088-869-2777	
わさび味噌	Aとされいほく本川支所(土佐郡本川村) 088-869-2006 遊漁者センター(吾川郡いの町長沢) 088-869-2777	
あめごの塩焼き	遊漁者センター(吾川郡いの町長沢) 088-869-2777	
あめごの甘露煮		
氷室まんじゅう		
ミネラルウォーター「源流」		
まな板		
ひえ		

嶺北の特産品



幻の碁石茶



はちきん地鶏



土佐褐毛牛



れいほく八菜



お祭り・伝統芸能

名称	所在地	時期・概要
百手(川戸・百原・長湊)	長岡郡大豊町川戸・百原・長湊	旧暦1月15.17日 9月15.17. 18日
岩原・長湊神楽	長岡郡大豊町岩原・長湊	旧暦9月15日、18日
薬師大祭	長岡郡大豊町東寺内(豊楽寺)	旧暦2月15日、4月8日、7月6日
蓮まつり	長岡郡大豊町粟生(定福寺)	7月中旬～8月中旬
施餓鬼舟	長岡郡大豊町(穴内川・吉野川)	旧暦7月16日、一部新暦8月16日
兼山廟大祭	長岡郡本山町 帰全山公園	4月下旬・10月下旬
本山町民祭	長岡郡本山町 本山小学校	8月中旬の日曜日
上下関阿弥陀堂奉納相撲	長岡郡本山町阿弥陀堂相撲場	8月14日
東光寺十七夜祭	長岡郡本山町東光寺	旧暦7月17日
金剛寺夏祭り	長岡郡本山町寺家 金剛寺	8月下旬
十二所神社秋の大祭	長岡郡本山町 十二所神社	11月23日
若一王子宮秋の大祭	長岡郡本山町寺家 若一王子宮	11月28日
三倉神社秋祭り	長岡郡本山町吉野 三倉神社	12月第1日曜日
伊勢川大黒祭	土佐郡土佐町伊勢川	春分の日
宮古野虫送り	土佐郡土佐町宮古野 白髪神社	6月20日
南川百万遍祭	土佐郡土佐町南川 大谷寺	7月土用の入り後最初の日曜日

中島観音様夏の大会	土佐郡土佐町中島観音堂	7月最後の土曜日
やまびこカーニバル	土佐郡土佐町 ふれあい広場	8月第1土曜日、日曜日
相川納涼祭	土佐郡土佐町 相川小学校	8月8日
石原納涼祭	土佐郡土佐町 石原小学校	8月15日前後
地蔵寺盆踊り大会	土佐郡土佐町 地蔵寺小学校	8月13日前後
野中祭	土佐郡土佐町 森中学校跡	8月第3又は第4土曜日
白髪神社中日祭	土佐郡土佐町宮古野 白髪神社	秋分の日の前日
高峯神社秋の大祭	土佐郡土佐町峯石原 高峯神社	12月第1日曜日
河内神社秋の大祭	土佐郡土佐町地蔵寺 河内神社	12月第2日曜日
白滝ふるさとまつり	土佐郡大川村朝谷	5月3日
大川村民祭	土佐郡大川村 川口小 大川中	8月中旬
大川村謝肉祭	土佐郡大川村朝谷	11月3日
本川神楽	吾川郡いの町本川地区 村内9ヶ所の神社	11月14日～12月4日
氷室まつり	吾川郡いの町越裏門	7月中の日曜日
源流まつり	吾川郡いの町 道の駅木の香	8月15日

やまびこカーニバル



大川村謝肉祭



5. 取り組み方向性の具体化に向け、素材発掘・企画立案（平成20年度）

経済的な活性化を図るには、実際に吉野川流域の自然に関わって経済活動を行っている人材の関与が不可欠である。外部から新しい人材の関わりつくることにより、これまでの取り組みから新たな展開を生み出すことを模索した。

❖ 人材や素材を一貫したテーマで繋げていくために「食」のプロデューサーにコーディネートをお願いすることとした。

- 「食」プロデューサー・(株)HAKKLの波佐本由香氏
- 波佐本氏は、広島県から島根県を流れる江の川流域において、島根の水源地域の農家さんと広島のレストランのシェフとを結び、上下流の連携による水源地域の活性化を進めてきた人物である。



❖ 波佐本氏が中心となり、吉野川流域をフィールドワークしながら、「食」をテーマにこだわりを持った活動を行っている人材発掘を行った。

- 鳴門の漁師・村公一氏
- 鳴門で環境の保全を大切にしながら漁業を行っている漁師である。「情熱大陸」(TBS系)にも出演したことで有名である。



- 嶺北で有機農業「土佐自然塾」・山下一穂氏
- 嶺北地域で有機農業に取り組む熱い思いを持った農家さんである。



- アレックス・カーが拓いた祖谷「ちいおり庵」・村松亨氏
- 東洋文化研究家で有名なアレックス・カーが守り続けてきた東祖谷の古民家で、山村の暮らしを都市の人々にお裾分けする活動を行っている。



- ❖ 村氏、波佐本氏らを中心に意見交換の機会を持ち、「食」に関わるプロの目線で「食のツーリズム」を構想し続けた。

- ❖ 基本的な考え方の整理
 - いま求められる地域活性化は、地域資源を活かした事業性の確保が必要である。
 - 民間主体となった地域活性化誘発のために必要な視点と取り組みを大切にす。
 - プロの目を通じて吉野川流域の「逸品」を磨く。
 - マーケットは、主に首都圏の「食」に関心の高い層を先行させる。
 - 社会実験ではなく事業化を志向し、経済（お金を生み出す）活動につなげる。
 - マーケティングに時間とコストを掛ける。

6. 活性化に向けた戦略仮説の構築

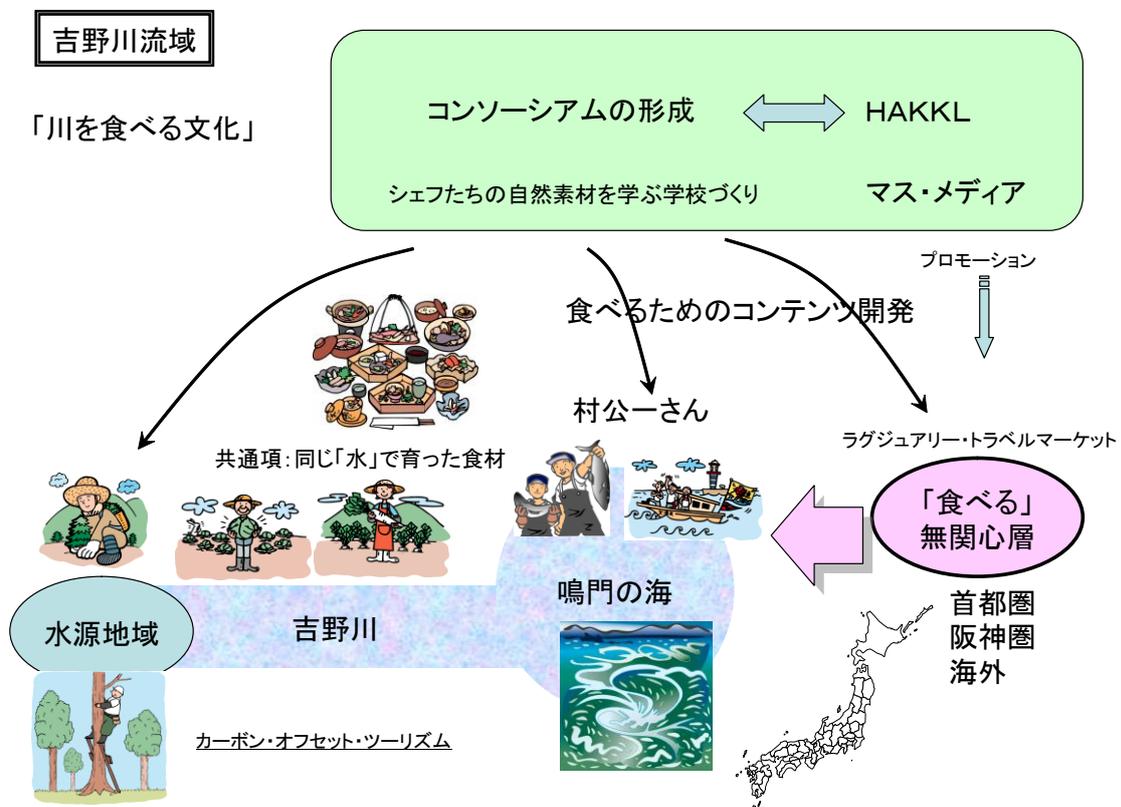
嶺北地域では、木材生産については、地元業者やNPOなどによる地域産材で家を建てる活動が継続的に展開中である。農協を中心とした「れいほく八菜」が徐々に市場の評価を得ているものの、担い手が高齢化している。大豊町の「碁石茶」は途絶えかけたものの、後継者の確保により、かろうじて継承された。一方、一層厳しくなる過疎化・高齢化により、流域連携を水源地域側で担ってきた「れいほくNPO」も福祉や環境などの現状を下支えする業務が目一杯で、水源地域にて水質調査を継続実施することさえも重荷となるほどである。このため、かつては下流域の「新町川を守る会」との上下流交流も行っているが、現状は停滞している。吉野川流域では、少量の素材提供は可能だが、新たな商品開発から流通形成までの体力は、極めて不透明な状況となっている。

観光の楽しみの一つは、「食」である。このところ食に関する問題が相次ぎ、いわゆる無関心層といえども食の安心・安全には関心を寄せざるを得ない。吉野川流域には、少量でも質の良い食材や独自の食材が存在し評価も得ている。食の問題を考えれば、生産環境の一つである「水」の重要性も意識される。従って「食の楽しみ」に関するコンテンツを掘り起こすことで、吉野川流域や水源地域の活動にも無関心層を誘導することができる。

吉野川流域の場合、水源地域側で新たな活性化の動きを作ることが厳しいことから、発想転換した。下流域での活力を伸ばし、水源地域を巻き込むことにより、吉野川流域としての魅力を形成したり、商品開発を進めたりしていく方向性である。まず下流域からプロジェクトを進め、水源地域を巻き込むことにより、吉野川流域としての魅力を形

成したり、商品開発を進めたりしていく方向性を模索していくこととした。

このような考えにもとづいて、具体的には、鳴門の海で活躍するカリスマ漁師「村さん（村公一氏）」の存在に着目した。村氏の環境意識、流域や水に対する認識の高さを、吉野川流域の展開と連動させた。吉野川流域の水が育む安全安心な食材を、プロたちの力によって、集中的に評価を高めることとした。村氏の評価は、獲った魚のみならず、地球規模で環境を考え漁業を営む社会性も着目されている。村氏は、「吉野川の豊かな水が鳴門の海を育てる」と認識しており、水源地域の保全にも高い関心がある。そこで、村氏に関わる仲間・友人・プロの調理職人たちと共に、吉野川流域の食材を楽しむプログラムを構築し、東京や大阪などから食べることを好きな人々（つまり食のロコミ力のある人々）のマーケットを対象にプロモーションを展開することを考えた。



このような考え方を実現化するために、あらためて「食のツーリズム」に関わることのできる吉野川流域の関係団体の掘り起こしが必要となった。そして、環境にこだわった農産物（食材）を育てている農家さん探しを始めた。

7. 地域ネットワークの掘り起こし

「食のツーリズム」の構想を模索するために、あらためて流域の様々な団体を訪問した。団体探しにあたっては、流域の行政などに紹介を求めたり、団体から関連団体を紹介したりしてもらいながら進めた。これらの団体を訪れ、食という観点で流域を活性化していく取り組みについて意見交換を行った。しかし、団体の多くは、参加が困難であるとの回答となった。理由としては、

- 経営的に関わるのが困難である。
- 未経験のことには参加困難である。
- 衛生管理上、一般の人間が立ち入ることが出来ない など、

実際に関与できる団体探しが続いた。しかし、水源地域の活性化のために組織的に食をテーマとしたツーリズムに参加できる団体はなかなか見つからなかった。これらのことから、広く様々な団体に声を掛けて展開することは、それぞれの組織的判断が必要なため、新しい活動を起こすには、小さくとも個人レベルの判断で参加が可能で、着実に動かすことのできるモデルを構築していくことが必要であると判断した。

8. 問題意識を持った個人のネットワーク化による「食のツーリズム」の推進

様々な団体との意見交換の中でも、「食のツーリズム」を通じて水源地域の活性化に起用していくことに積極的だったのは、吉野川下流に暮らし、環境に配慮して漁業を行うことで首都圏などの一流の料理人・シェフなどからカリスマ漁師として評価されている村公一氏であった。これまでの様々な団体との意見交換の結果も踏まえ、今後、個人レベルで同じ問題意識を持って流域で食に関わるなりわいを持つ方々と連携しながら、「食のツーリズム」を推進していくこととした。

以下は、様々な団体に所属しながら「食のツーリズム」に関心を持っている人々である。

団体	活動特性と連携の可能性
水源地域で活動する N P O 関係者	山間地域が抱える様々な課題に対して新しい地域づくりのあり方を調査・研究するとともに、環境、産業、福祉、防災、情報化など様々な分野において広域的な活動を行い、吉野川流域の住民及び各種機関と連携しながら、地域の発展及び公益の増進に寄与している。このような活動を通じて嶺北地域の農家さんなどとの繋がりは深い。このため、食のツーリズムのプログラム内容に応じて、協力してもらえそうな農家さんたちを紹介できる。

水源地域で活動する有機農業関係者	嶺北の環境を活かした有機農業を学ぶ学校に関与している。卒業生たちは、嶺北を始め周辺地域に就農しているものの、販路の開拓に苦労している。食のツーリズムのプログラムによっては、卒業生たちが関与したり、生産物を提供することができる。
上流地域で活動する地域づくり団体	祖谷溪で茅葺きの古民家を中心とした地域づくり活動を行っている。周辺の農家は、地域固有の農産物を生産し、地域固有の調理方法等の食文化を持っている。今後、このような食文化を活かしたツーリズムを促進させたい。しかし、山の中からのプロジェクト誘発は難しいので、流域など広域的な魅力の発掘や連携によって地域の個性を発揮させることができるかもしれない。
吉野川中流域で特産品等の販売を行っている事業者	徳島道の途中にあるハイウェイオアシスに関わっている。地域づくりに熱心で、施設を使って地元農家さんたちによる直売などを支援している。今後、地元だけでなく例えば吉野川上流地域などの特産品販売などを支援することも可能である。
生協活動の関係者	安全な食にこだわった生協活動に関与している。このため吉野川流域の有機農業の農家さんなどとも関わりが深い。活動の中では、水源地域の木材を積極的に使った木造民家の建築を促進させる運動も行っている。いまは食の安全安心に対する関心も高い。社会の関心が高まることで役に立てるなら、関係する人々を紹介することができる。
漁業関係者	全国でも瀬戸内海を漁場に持つ徳島の市場は評価が高い。環境に目を向けると、川を通じて流れ込んできたごみが海を汚染している。これは、漁業にも少なからぬ影響があり、その対策に苦労している。食を通じて、水の環境に関心が高まることは大切なことであり、可能なことがあれば協力したい。
村公一氏	環境を大切にしたい漁業に取り組む。「村さんのスズキ」「村さんのわかめ」として、その味の良さと品質の高さが評判となって名前は口コミで広まりつつある。和洋問わず、プロの料理人から食材を求められるが、その料理人の食材を扱う技術を見て、その後の取引をするかどうかは絞り込んでいる。食材の良さは、地域の環境と密接である。活動が環境を守ることにつながるのであれば、是非協力していきたい。
野菜ソムリエ	徳島県内の野菜ソムリエたちでネットワークをつくっている。県内には、こだわりの農家さんたちが、美味しい野菜を育てている。このような農家さんたちを応援していきたいので、日常の仕事の傍らではあるが、可能な限り食のイベントなどに関わっていきたい。
下流域で活動するNPO関係者	徳島市内の新町川の河川清掃や水辺をきっかけとした地域づくりを促進している。これまでも水源地域を何度も訪れて、水源の森づくりなどに協力してきた。地域活性化を進める上で、食べることを扱うのは、楽しくて参加もしやすい。自分たちの活動でも、市内から船に乗って周辺の農家さんたちの朝市に買い物に行くようなプログラムを考えている。食のツーリズムは、今後、様々な観点で広げていくことが可能である。

これまでの活動を通じて、食のツーリズムを進めていく諸条件を整えてきた。今後は、具体的にツアーを構築し、またその改善を図りながら継続実施させていく仕組みづくりを検討していく必要があった。

9. 食べるツーリズムの構想推進

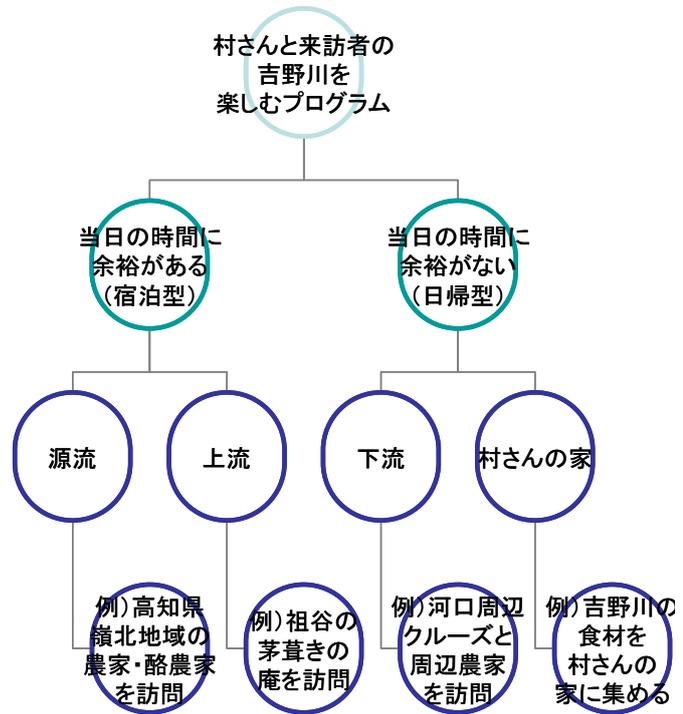
吉野川流域のネットワークの掘り起こしを通じて、実際の「食のツーリズム」の考え方の再整理を行った。

プログラムのねらいは、水源地域の農産物を通じて、都市部住民との交流を形成し、結果として、水源地域の活性化に繋げていくことである。

このために、料理人などを中心とした食のプロたちが訪れるツアーを組む。ツアーは、参加者の状況によって右図のように、宿泊型と日帰り型が考えられる。料理人の場合、飲食店を複数日に渡ってお休みすることが困難なことが多く、結果として、食材の勉強をしたくても現地に赴くことが出来ない人が多いようである。

このような参加側の諸事情も考慮して、大きくは4つのオプションが考えられました。食のツアー自体は、何回でも開催していただける可能性がある。仮に日帰りツアーの参加であったとしても、複数回の参加によって、徐々に地域事情に詳しくなることを目論みた。

参考までに、これまでの情報から想定されるモデルプランを例示する。



「水の源を食べるツアー（上流域）」

1. 徳島市内発
2. 吉野川沿いを上流に向けて移動
3. 下流域の環境を活かした食材（甘藷・蓮根等）の見学
4. 中流域の環境を活かした食材（有機野菜、川魚等）の見学
5. 上流域の環境を活かした食材（地域固有種）の見学
6. 滞在先にて、移動しながら集めた食材を使って、料理教室の開催
7. 宿泊・翌日解散

「水の恵みを食べるツアー（下流域）」

1. 漁師町に集合
2. 上流・中流域の農家さんなどが食材を持ち込み
3. 生産者と首都圏などから来た料理人などが交流
4. 解散

このようなツアーを推進するには、ツーリズムを推進するプロの協力が必要となる。特に日本全体の旅行スタイルが徐々に変化し、「着地型」といわれる旅行スタイルが伸びている。これは、従来の出発地から旅行先までをすべてパッケージにした旅行商品ではなく、訪ねた先で地元を楽しむプログラムを取捨選択する旅行商品である。このような旅行商品は、開発に手間が掛かる一方、旅行会社にとって利益幅の確保が難しく手が出しにくいものである。このため、地域側が開発したプログラムと旅行会社が連携することで旅行商品として成立させる手法が、全国各地で試みられている。今回の食のツーリズムも、このようなビジネスモデルを踏襲したプログラムとしていくこととした。

10. 3カ年プロジェクトの中間段階での方向の整理

平成 19 年度から平成 20 年度にかけての取り組みによって、吉野川流域における水源地域活性化の新しい流れが見え始めた。中間段階での方向の整理は、以下のような内容である。

①環境（森）から地域経済（食）へのテーマの拡大

これまで上下流の連携のテーマは、水源の森づくりが中心だった。これだけでは、水源地域の経済的活性化に繋がらない。このため、食の安全安心・おいしさをテーマとすることにより、環境だけでなく地域経済につながる動きを誘発する可能性を見出した。本調査の大きな課題として、いかにして無関心層を動かすかというものがある。例えば水源林を植林するなどの活動は、水源地域まで出かけようとする意欲のある人々に限られてしまう。また、水源地域の木材で家を建てる運動は全国各地で見られる。このような運動を広げるには、都市部の無関心層が水源地域に関心を持ってもらう必要がある。

これらの状況から考えると、水源地域に関心の高い人々による活動がある一方で、無関心層に働きかけることを同時に展開することが求められている。水源地域の地域資源の一つである食材は、流域の一体化を進める上で、手軽でわかりやすいテーマだと考えた。

②新たな担い手の発掘

テーマを拡大したことにより、水源地域や流域の活動に関与する新たな主体として「食」に関係する職業の人々の協力を得ることができた。また、吉野川流域には、特定の農産物による産地形成を行っている場所は少なく、各農家が少量多品目で農産物を生産する傾向にあることがわかった。特に源流部の農家には、一般には流通していない地域固有品種の農産物を栽培していることもわかった。一方、食に関する職業と言えば、シェフや料理人が思い浮かびます。関連するスタッフもいるし、仲買の人々もいる。こ

のような人々は、水源地域とか地域活性化という議論にはほとんど縁がない。しかし、首都圏のシェフなどは、農家が農産物をこだわって育てる様子を見る機会も少なく、また地域固有の食材を調理する技術を学ぶ機会が少ないことから、「食のツーリズム」のような機会に参加したいという意向もわかった。

今回の取り組みは、マーケット（ターゲット）の問題意識に合わせた関心喚起の機会を形成し、結果として本来の水源地域という問題意識に繋げていくことが、無関心層の参加を促す手法であることがわかってきた。

平成 20 年度の情報収集と「食のツーリズム」の検討結果を踏まえ、今後、水源地域の新たな産業振興を図る手法として、以下の検討が必要となった。

- 源流の農家を訪ねるツアーの企画実施
- ツーリズムの促進と農産物販売の融合
- ツアー推進を通じて、旅行事業として継続性を持つことのできる体制構築

このことにより、現場への観光誘致だけでなく、料理人たちが珍しい農産物を首都圏の消費者に提供するきっかけとなることから、地産外消の促進による水源地域の活性化に結びつけられる。ここで実際の経済的活動を進めることにより、調査終了後も継続的に活動が進められる体制づくりを行う必要がある。

このような課題を踏まえ、平成 21 年度は、実際に食のツーリズムを展開する企画を進めた。

第4章 食のツーリズムの推進

1. 自立的・持続的な活性化活動の仕組みの構築

平成20年度を掛けて整理してきた取り組み方向性を踏まえて、あらためて吉野川の流域をフィールドワークしながら、食のツーリズムの具体化に向けた調整を行った。

1) 企画立案

❖ 「食のツーリズム」の形成のために、波佐本氏がれいほくNPOを通して、地域資源と食材さがしの絞り込みを行った。

- 素材探し
- ターゲットの想定（首都圏のシェフ等）
- 事業化への段取り（何といたっても資金が無い中での事業化は困難を極める → 知恵と時間を掛けて）
- 場づくり・仕組みづくり
- 事業収支の想定



❖ 村氏、山下氏、村松氏、波佐本氏らがフィールドワークを行い、生産者との意見交換や食材を確認しながら商売になるクオリティかどうかの評価活動を行った。

- ツアー・ルートの検討
- 有機野菜の検討（生産者・食材）
- 嶺北赤牛の検討（生産者・食材）
- 郷土料理（蕎麦米雑炊、原種芋）の検討
- お弁当の検討（生産者・食材）
- 地域の文化、地域の食文化の聞き取り



❖ 高知県にも関わっている奥田シェフへの協力依頼など、東京の料理店で「食」のプロたちを交えた意見交換を行った。（奥田シェフは、毎日放送「情熱大陸」などで山形・庄内野菜を全国に広めたことで有名である。）



2) フィールドワーク

ふだんは漁に出かけてなかなか参加できない村氏を交え、嶺北地域、祖谷地域の人々との意見交換とフィールドワークを行った。

有機農業に取り組む嶺北地域の若者の農場



高知県内でも非常に品質の高い酪農経営を行っている親子



「れいほく八菜」を推進し、また地元の酒蔵で仕事をする農家



地元の食材を遣って、様々な郷土料理を準備してくれる祖谷の農家さん



地元で採れる芋は、厳しい気候条件に適応して非常に味が濃い



2. フィールドワークによるプログラムの検討

フィールドワークを通じて、吉野川の水源地域における様々な活動や季節ごとの魅力を把握することができた。以下に、各事例の活動内容と季節ごとの様子を紹介する。

■ ちいおりトラスト

今回の食のツーリズムの中心となるプログラムの対象地域。
旅行者にとって、山村の暮らしを垣間見ることができる。

■ 山下農園・土佐自然塾

食材の調達において、山下氏の協力が重要となってくる。
有機農業の実際に触れ、また有機農業を目指す若者たちとのふれあいをプログラムに絡めることができる。

■ 「れいほくスケルトン」を展開する嶺北木材協同組合

中心人物である森昭木材の田岡氏は、長年、れいほくの森づくりに泥抑してきた。その人柄と行動力で、多くの人々の支持を得ている。食のツーリズムの発展型の中で、田岡氏の協力を得ていくことも考えられる。

■ 嶺北木材協同組合が支援する学生グループ「学生団体FAN」の活動

田岡氏らの支援のもとで高知大学の学生たちを中心とした森づくりや山村の暮らしを考え行動するネットワークである。全国の大学生を集めたツアーなどを開催している。

■ れいほくNPO

れいほくNPOは、嶺北地域の様々なイベントに関与している。このため、食のツーリズムの開催時期と重なれば、地元住民とのふれあいなどを演出することができる。

■ コープ自然派

コープ自然派は、流域を学ぶ活動を行うなど、食と自然環境に関心を持つ団体である。例えば、代表理事が嶺北でのシンポジウムに参加するなどの交流を持っている。

■ NPO 法人 里山の風景をつくる会

下流地域から源流の森を応援する活動を行っている。嶺北の田岡氏とも交流を深めている。

1) ちいおりトラスト

ちいおりは、徳島県東祖谷山村にある築三百年の茅葺き屋根の古民家である。祖谷は、日本三大秘境のひとつであり、平家の落人が隠れ住んだと言われるほど険しい山と谷に囲まれた集落である。ちいおりトラストは、日本の文化的価値観の再興、伝統的な実践による経済的な地域振興、有機栽培農業を通じた交流事業、地域活性化のための公開フォーラムの開催を通して自然環境を守り、次世代の人たちが住みやすい村づくりを考えている。現在、簾庵（ちいおりあん）は2007年11月にスタートしたNPO「簾庵トラスト」により運営されている。アレックス・カーが30年前に補修をして以来、長い年月風雨にさらされてきたため、屋根の一部が既になくなっており、2009年に屋根葺き替えた。同時に、三好市（祖谷を含む自治体）や京都の古民家修復保全を専門とする会社「株式会社 庵」、それに祖谷の隣人たちと協力して、近隣の村落の保続可能な観光資源の開発を目指して活動している。

食のツーリズムを考えていく上で、ちいおりトラストの活動は、都市住民が是非立ち寄りたい場所である。四季を通じた変化は、訪れるたびに感動がある。次頁には、本プロジェクトのメンバーである村松亨氏が撮った写真と描いたイラストを掲載する。

chiori.org アレックス・カーの見つけた桃源郷「簾庵」 - Mozilla Firefox
http://www.chiori.org/index_jp.html

アレックス・カーの見つけた桃源郷「簾庵」

冬期休館のお知らせ
1月から2月末まで、休館とさせていただきます。
ご訪問の受け入れは、3月より再開致します。

お問い合わせ先： 0883-76-7706
jinfo@chiori.org

MEMBERSHIP
簾庵の夢にご支援をお願いします →

CHIORI STORY →
PHOTOGRAPHS BY TORU MURAMATSU
TEXT BY ALEX KERR
YASUNOBU TAMARI

ABOUT US
RENOVATION
BLOG
EXPLORING IYA
ACCESS

alexkerr.com
lyoto-machya.com
Experience old Iyoto

small

INFORMATION / PUBLICITY / DONATION

2010.03.18 空き家を見に行く 2 興奮
2010.03.18 PR: 運を聞く！関連バーストーン
2010.03.18 空き家を見に行く 1

完了

簾庵(ちいおり)は徳島県東祖谷山村にある築300年の茅葺き屋根の古民家です。祖谷は、日本三大秘境のひとつであり、平家の落人が隠れ住んだと言われるほど険しい山と

ちいおりの四季 (写真およびイラスト 村松亨氏)

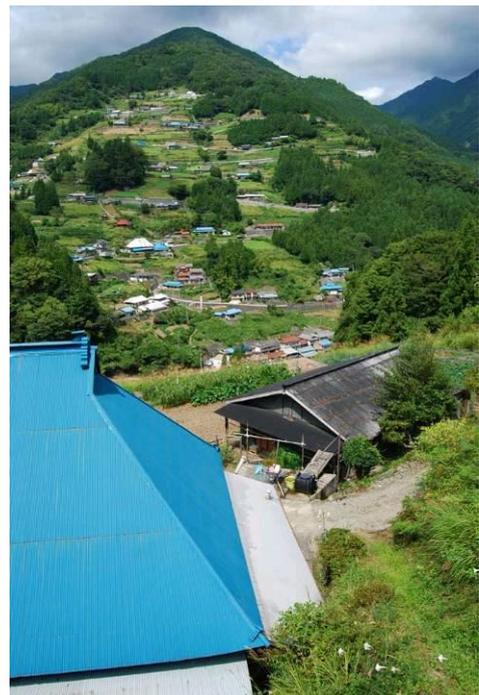
4月



5月



6月

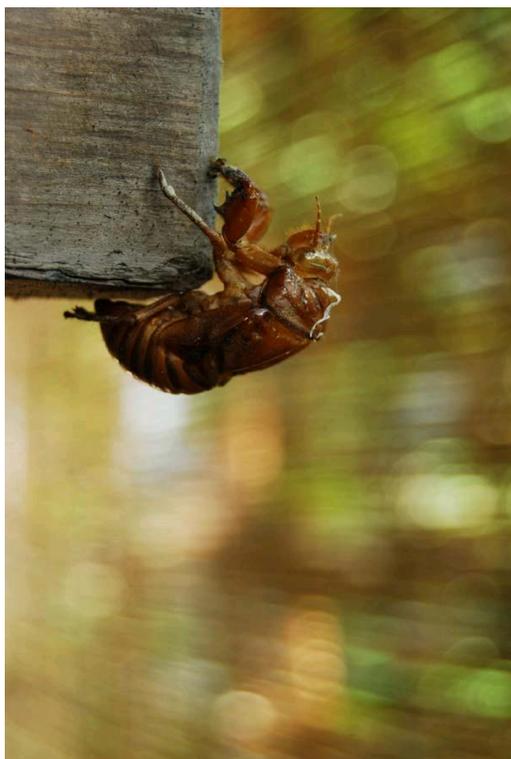




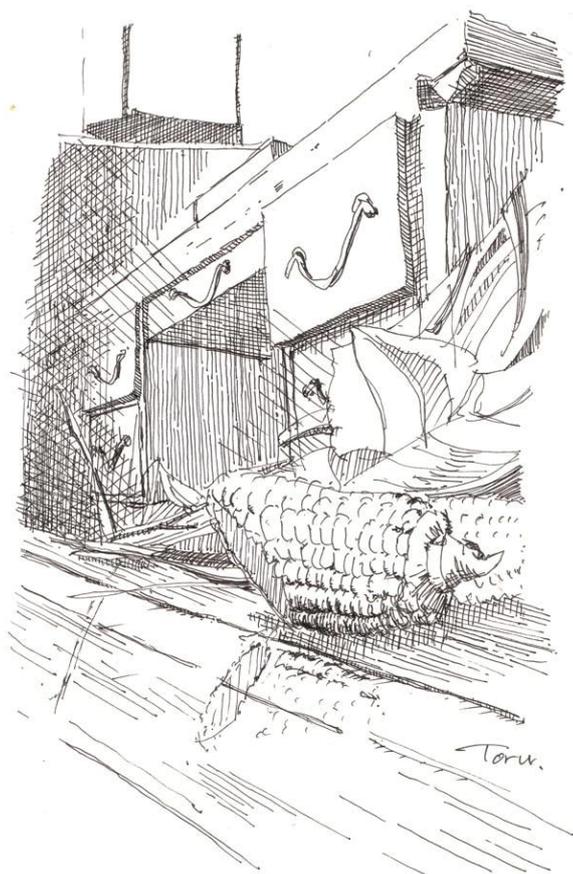
7月



8月



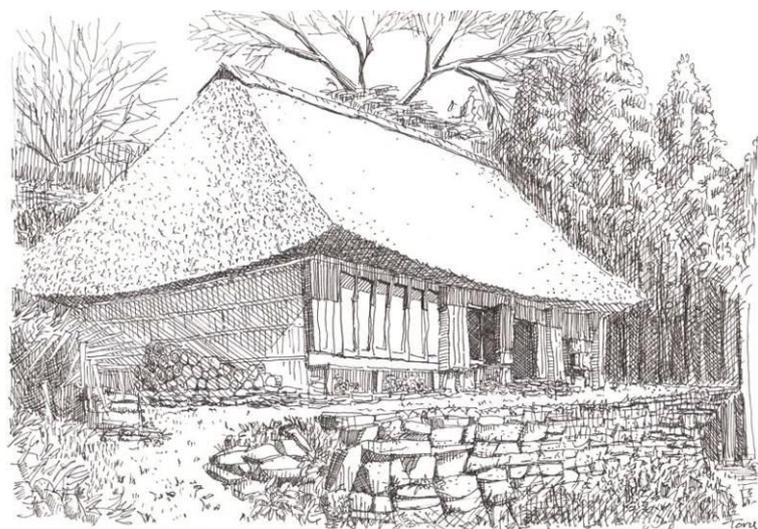
9月



10月



1 1月



1 2月



1月



2月



3月



2) 有機のがっこう「土佐自然塾」

(高知県土佐郡土佐町土居630番地)

「有機のがっこう」は、山下一穂氏が中心となって嶺北地域で開かれている有機農業を学ぶ場である。山下氏自身が、嶺北地域で有機農業を取り組んできた。これを高知県の橋本大二郎氏（当時知事の時代）に応援して立ち上がったものである。

食のツーリズムにおいて、山下氏には食材提供の連携を図ってもらうことになる。

以下に、有機のがっこうのコンセプト及び1年間の活動の様子を掲載する。

塾長からのメッセージ

「田舎からの国造り」

山下一穂

「人間は、考える農（わし）である」

(溢れるような情報に振り回されることなく、主体性を持って、自己責任で自分の人生を生きよう。という意味)

小さな自分を捨ててみませんか。もっと大きな自分を探しに来ませんか。子供達の未来に、日本の将来に、人生をかけてみるのも悪くはないでしょう。

「土佐自然塾」で、その第一歩を踏み出してみましよう。

社会のために一定の役割を果たしたい志の高い若者達には、その具体的方法論を教えます。圧倒的なマンパワーを誇る団塊の世代は、かつてのハングリー精神と国を思う情熱を田舎に持ち帰ってください。今度は会社や家族のためでなく、もっと大きな視野を持ち、次の世代のために「田舎からの国造り」に参加して、存在感を発揮してください。

様々に絡んだ複雑な社会問題（社会、経済、環境、医療、教育、福祉など）。それらを一つ一つ解決していくためには、五感をとぎすませ、解（例えば有機農業を核として、美しい日本を取り戻す）を予測する能力を養い、それを包括的、継続的に証明していく、意思と行動力が大切です。

人間の脳は、巨大なコンピューターに匹敵するほどの情報処理能力があると言われていますが、実際にはさほど快適に作動しているとは言えません。それは、脳内ハードディスクが小さな自我に埋め尽くされていて、ほとんど空き容量がないからです。

「小さな自分」をゴミ箱へ捨てて、ハードディスクの空き容量を増やせば、「大きな自分」が見えてくるはずですよ。

平成 21 年度 有機のがっこう「土佐自然塾」講座一覧 (案内より)

毎週火曜日と木曜日の午前中 3 時間(1 コマ)を基本に年間 54 コマを予定しています。講義は有機農業に特化した 22 コマのほか、各種栽培の基礎等については高知県環境農業推進課専門技術員などが支援いたします。

内容については若干の変更もありますのがご了承ください。

1. 有機農業	22 コマ	有機農業の実態や、実践農家による講習など (公開講座)
2. 野菜	3 コマ	種野菜栽培について
3. 水稲	2 コマ	高知県における水稲栽培とがっこうでの取り組みについて
4. 雑草	1 コマ	雑草の種類やカバープランツ等、雑草対策について
5. 植物生理	2 コマ	光合成や代謝等、植物の生理について
6. 病害虫	1 コマ	病害虫の診断や防除方法について
7. 土壌肥料	2 コマ	土壌肥料や植物栄養、土作りについて
8. 堆肥製造	2 コマ	堆肥の種類や製造方法について
9. 農業経営	7 コマ	経営概論、労務管理等経営全般について
10. 流通・販売	6 コマ	流通形態について、様々な実践事例を紹介
11. 法律・制度	2 コマ	就農支援制度や農薬取締法など農業に関する法律や制度について
12. その他	4 コマ	農業機械の安全使用、ポップ・リーフなど多岐の内容を予定

有機のがっこう「土佐自然塾」の四季

4月



5月



6月



7月



8月



9月



10月



11月



12月



1月



2月



3月



平成21年度公開講座

コマ	開催日	内 容	講 師
1	4月4日(土)	有機農業とは	自然農法国際研究開発センター
2	4月7日(火)	有機農業の現状と展望	自然農法国際研究開発センター
3	5月7日(木)	塾長講義 1	塾 長 山下一穂
4	6月2日(火)	微生物	自然農法国際研究開発センター
5	6月3日(水)	生きている土・目標とする土	自然農法国際研究開発センター
6	6月4日(木)	有機農業全般	京都 大学農学博士 西村和雄先生
7	6月23日(火)	EM活用の自然農法	自然農法国際研究開発センター
8	7月18日(土)	田んぼの生き物調査	NPO法人生物多様性農業支援センター 谷川 徹 氏
9	7月23日(木)	有機JAS制度	NPO法人高知県有機農業研究会
10	8月25日(火)	塾長講義2	塾 長 山下一穂
11	9月3日(木)	塾長講義3	塾 長 山下一穂
12	9月15日(火)	塾長講義4	塾 長 山下一穂
13	9月29日(火)	塾長講義5	塾 長 山下一穂
14	10月21日(水)	育種・自家採種	自然農法国際研究開発センター
15	10月22日(木)	育土技術～植物と土壌編～	自然農法国際研究開発センター
16	10月22日(木)	農法事例	信州ぶ組代表 土肥寛幸氏
17	10月25日(日)	微生物の農業利用	琉球大学 比嘉照夫 教授
18	11月20日(金)	有機農業全般	東京大学農学博士 木嶋利男先生
19	11月26日(木)	有機農業全般	京都大学農学博士 西村和雄先生
20	12月17日(木)	塾長講義6	塾 長 山下一穂
21	1月7日(木)	塾長講義7	塾 長 山下一穂
22	1月19日(火)	塾長講義8	塾 長 山下一穂
23	2月16日(火)	育土技術～土壌肥料編～	自然農法国際研究開発センター

3) 「れいほくスケルトン」を展開する嶺北木材協同組合

嶺北木材協同組合は、森昭木材(株)の田岡氏(下記写真中央)などの努力により、嶺北産木材の品質向上と販路開拓に取り組んでいるグループである。

れいほくの森を巡る見学ツアーを企画しており、今後、連携を進めていくことができる団体である。



サイトマップ

嶺北木材協同組合のサイトをご覧いただき、ありがとうございます。
豊かな高知の自然と深い山脈が育てる、嶺北木材に関する情報を発信しております。

嶺北木材に関するお問い合わせは
0887-82-1055(代)

原木市場から

嶺北★山と木の情報

- 中江産業(株)
- レイホク木材工業(協)
- 森昭木材(株)

嶺北の建築用材

嶺北★遊びスポット

れいほく規格材

- フレームの考え方
- 木材の品質
- 注文方法

嶺北木材協同組合について

(infomation)

- SGECの認証を受けました。
嶺北木材協同組合、森昭木材(株)、レイホク木材工業(協)は認証材の取扱認定事業体として、また中江産業(株)、土佐町林業研究会会員所有山林計4千ヘクタールの森林が認証を受けました。
- 「れいほくスケルトン」製品説明会を開催しました。
平成19年11~12月、大阪と高松会場で開催しました。多数のご参加をいただきありがとうございました。
今後も、続いて「れいほくスケルトン」の情報を発信していきます。どうぞよろしく!
- 嶺北の森林へ遊びにいらっしゃいませんか?
随時、森林見学のご案内をいたします。お問い合わせください。
- お問い合わせ・ご注文は
れいほくスケルトン・れいほく規格材 tel 0887-82-1237
レイホク木材工業(協) tel 0887-70-1388
森昭木材(株) tel 0887-82-1818



このwebsiteは 全国中小企業団体中央会の平成19年度組合等web構築支援事業の助成を受けています。

<p>高知県 嶺北林業振興事務所</p>	<p>社団法人 高知県建築 設計監理協会 www.sekkan-i-tosa.com/</p>	<p>木の出会い館 木の住まいの館</p>
<p>全国中小企業団体中央会 http://www.chuokai.or.jp/</p>	<p>創業・出稼・革新ポーター 高知県中小企業団体中央会</p>	<p>NPO法人 木の家会</p>

「れいほくスケルトン」

れいほくスケルトンは、下記のコンセプトから生まれた。

家の安全はまず骨組から

れいほくスケルトンは、間取りや外観より、骨組を重視する考えから生まれました。

そして今、すぐに組み上げられるようにプレカットした構造材を、産地から建築現場軒先へ直送することができるようになりました。

販売するのは、骨組だけです。骨組以外の部分や設計などは、工務店や建築士の方々がそれぞれの経験や個性に合わせてできるように、“おまかせ”になっています。

木の家に組み組みたい、でも大工がない……

そんな工務店さんに

れいほくスケルトンでは家の安全を骨組でしっかり支えているので、造る側の負担少なく取り組むことができます。オプションとして、建て方指導も可能です。

信用できる材木を入手したい、安全を確保した上で自由な設計をしたい……

そんな建築士さんに

れいほくスケルトンでは原木の産地から安心できる木を入手することができます。しかも、工務店の力量によらず骨組が組みあがっていくので、施主の方との設計に集中することができます。

嶺北木材協同組合運営の ホームページより

れいほくスケルトン

SKELETON

A house only for oneself
who makes it with Reihoku Skeleton.

お問い合わせ
LINK
サイトマップ
HOME

れいほくスケルトン 木の家を建てる パートナー工務店 ベーシックプラン 品質について 産地を知ること ブログ
産地情報

■産地を知ること

- 1 いい木づくりは山の現場から
- 2 SGEC認証の森
- 3 使用目的にあった木を選びます
- 4 科学の目を導入する
- 5 出荷基準を自主的に持つ
- 6 れいほく規格材はこうして生まれました
- 7 現場納入までの工程を産地側が肩代わり
- 8 見学会やバスツアーなど開催
- 9 れいほくスケルトンへの想い

嶺北木材協同組合
Reihoku's Log

クリック

全国旅行
高知県産材
住宅ローン

産地を知るとは安心につながる

これまで山の仕事にかかわり、山の荒廃を見、木材価格の低迷を憂えてきましたが、産地側が山の向こう側に住む消費者のことを思う機会はあまり多くありませんでした。

木の家を建てたいけど木のことがよくわからない……
そんな消費者の方の不安に、私たち山側がもっと積極的に応えていかねばというにたりました。

木の家のこと、国産材を使うということ、環境や健康により暮らしのこと、日本の山の現状や生産される木の情報を消費者の方に知っていただく努力は、必ず健康な山づくりにつながり、そして山とまちに住む人々の距離を縮めることになると信じています。

歴史と伝統のれいほく地域

高知県の真ん中の北側に位置する嶺北地域は、吉野川源流域にある山間地で、すぐお隣に愛媛、香川、徳島の3県があります。嶺北地域には早明浦ダムがあって、香川用水を通じて香川県の皆さんの水源ともなっています。



このダムの周辺・周囲は森林が豊富で、きれいな水の供給源としても重要な森林なのです。高知県の森林率は84パーセントですが、嶺北は88パーセントと山が多く、地形は急峻で、年間2500mmを超える降雨量、寒暖の差が大きく積雪が少ないなど、良質な杉が育つ条件が揃っています。

こうした自然条件に恵まれて、昔、長宗我部元親が豊臣秀吉に嶺北の白髪山のヒノキを主とする木を献上したり、大阪城の築城にも使われたりしています。その後も優良材が吉野川経由で大阪の町へ運ばれ、わが国初の木材市場を形成しました。今でも大阪には「土佐堀」や「白髪橋」という名が残っているほどで、土佐と関西圏のつながりの深さを感じさせます。

4) 嶺北木材協同組合が支援する学生グループ「学生団体FAN」の活動

「森の未来に出会う旅」

主催 森の未来に出会う旅実行委員会 (学生団体FAN、嶺北木材協同組合、四国森林管理局、(社)高知県森と緑の会、(社)高知県建築設計監理協会、嶺北林業振興事務所、木と人出会い館、NPO れいほく活性化機構)

森の未来に出会う旅

森から学ぶ木造建築の設計士セミナーin嶺北

HOME
コンセプト
概要
講師紹介
CONTACT
BLOG
LINK



REIHOKU
四国
高知県

四国の中心部に位置する高知県嶺北。緑に囲まれた自然豊かな地域です。

Wooden architectural design seminar in REIHOKU

「森の未来に出会う旅」とは、6泊7日で木造建築のこと全般を学ぶセミナーです。林業見学から始まり、原木市場や製材所の見学、現役の設計士の講義や匠の技の体感、木造の建築物見学などを行い木造建築への理解と関心を高めることを目的としています。

期 間
2009年8月23日(日) — 29日(土) [6泊7日]

開催場所
汗見川ふれあいの郷清流館
高知県 長岡郡 本山町 沢ヶ内626 (高知駅からバス送迎あり)

参加費 (食費、宿泊代含む)
学生: 2万5000円
※学生は原則6泊7日間参加してください。
社会人: 5万円
(部分参加も可能です。詳しくはお問い合わせください。)

対 象
木造建築に興味のある方

募集人数
20人(先着 8月10日まで)

Curriculum

<p>■ 8/23 世界と日本の森林問題 まちに森を作る</p> <p>■ 8/24 健全な森林と荒廃した森林の見学 山での暮らし(林業家の話) 原木市場、製材所、プレカット工場の見学</p> <p>■ 8/25 設計の心構え 木造の工法 伝統、在来、設計事例 職能とチームワーク びかっときちっとどしっと作る</p>	<p>■ 8/26 世界の建築史と土着建築 土佐派概論 100年住む家を作るために 土佐和紙概論 土佐しつくい概論 大工・左官の技</p> <p>■ 8/27 れいほくスケルトンの強度性能 木材の強度・比熱実験 建築物の見学 設計事務所の見学</p>	<p>■ 8/28 木材マーケティング論 れいほくスケルトン概論 スケルトン住宅の見学</p> <p>■ 8/29 振り返りプレゼンテーション 交流会</p>
---	---	---

※ 講師の予定により変更する場合があります。

- ❖ 高知大学の飯國氏は、水源地域対策課の過去の調査およびれいほくNPOの活動支援などにご協力頂いている先生である。



高知県内外で活躍されている方々を講師として迎えております。

カリキュラム	氏名	所属
山の学習	飯國 芳明 氏	高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科教授
	田岡 秀昭 氏	嶺北木材協同組合理事長
設計の学習	西森 啓史 氏	西森啓史建築研究所
	細木 茂 氏	細木建築研究所
	太田 憲男 氏	アクシス建築研究所
	上田 堯世 氏	上田建築事務所
	徳弘 忠純 氏	徳弘・松澤建築事務所
	松澤 敏明 氏	徳弘・松澤建築事務所
	山本 長水 氏	山本長水建築設計事務所

【後援】

高知県、土佐町、本山町、大豊町、大川村、（社）日本建築学会四国支部、（社）日本建築家協会四国支部、NHK 高知放送、KSS さんさんテレビ、KUTV テレビ高知、RKC 高知放送、高知新聞社、南の風社、NPO 木の建築フォーラム

高知大の学生団体が1泊2日セミナー…国産材の良さ建築学生に

(2010年3月6日 読売新聞)

木造の龍馬博会場など見学…6日は間伐体験

建築を学ぶ学生らに国産材の魅力を知ってもらうセミナー「木材のミライたち」が5日、始まった。木造住宅の5軒に1軒の割合でしか国産材が使われていないといい、1泊2日で林業の現状や木造の良さに触れてもらい、〈国産の木の家〉の普及を狙う。参加した関西や東北などから来た8人の学生らがこの日、高知県産材で造られた土佐・龍馬であい博のメイン会場を見学したり、高知の森や林業についての話に耳を傾けたりした。



高知大の学生で作る「学生団体FAN」が主催。最初に、高知の木造建築家グループ「土佐派」が手がけたJ R高知駅前の土佐・龍馬であい博のメイン会場「高知・ろまん社中」と「とさてらす」を見学した。

設計を手がけた建築士の平山昌信さんが、水平を強調した外観や、龍馬博が終わった後も木材を再利用できるように工夫したことなどを説明。参加者らは壁や天井を見上げ、東北大3年富永麻倫さん(21)(仙台市)は「1年で壊してしまうのはもったいなくらい立派」と驚いていた。全国で初めて木造アーケードが造られた、はりまや橋商店街も見て回った。

午後からは、山の荒廃や高知の林業について、3人の森林の専門家らが講義。嶺北木材協同組合に所属する木材会社社長の田岡秀昭さんは「まちに森を作る」と題して話した。森が荒廃し、保水力のなくなった「緑の砂漠」が増えているとして、「日本は世界一の森林国にもかかわらず、木材の8割を輸入している。消費者に木を使ってもらい、切ることで、森を守るという循環を取り戻さないといけない」と訴えた。

4月から高知大で森林について学ぶという南国市の比江春花さん(18)は「森の荒廃は、私たち若者が解決しなければいけない問題。活動されている方の話を聞けて有意義だった」と話していた。

6日は、本山町や土佐町を訪ね、嶺北林業振興事務所の間伐を体験。原木市場や木材加工工場を見学する。



5) れいほくNPO 平成21年度の主な活動より

れいほくNPOでは、嶺北地域の様々なイベントに關与している。仮に食のツーリズムと開催時期を重ねることができれば、旅行者が地元住民とのふれあいの機会としてプログラムを組むことができる。

第29回早明浦湖水祭シンポジウム



テーマ

よりよき吉野川を目指して

～「農」を活かし
「民」を守る～

2009 早明浦湖水祭 シンポジウム

開催要綱

◆テーマ◆ よりよき吉野川をめざして
～「農」を活かし「民」を守る～

◆趣旨◆

吉野川は、流域の歴史や文化の原風景として、四国四県の生活と産業を支えるかけがえのない大河である。

このシンポジウムは、「四国のいのち」早明浦ダムの地から、荒廃が進む水源の森などの問題を踏まえ、保水力を高めると共に森林資源を有効活用し産業の活性化を図るためには何が必要か、上下流域で活動している方々の意見を交え、良い方策を見いだす機会となることを願い開催する。

また、吉野川流域の住民が互いの問題点を理解・共有し、交流を深めることで流域全体の協働・連携を促進することを目的とする。

◆開催日◆ 2009年 8月1日(土) 13:00～16:15

◆開催場所◆ 高知県土佐郡土佐町井1450 土佐町農村環境改善センター

◆主催◆ 早明浦湖水祭実行委員会(事務局:土佐町役場内)

◆後援◆ 国土交通省四国地方整備局徳島河川国道事務所・吉野川ダム統合管理事務所・四国山地砂防事務所、愛媛県、香川県、徳島県、高知県、独立行政法人水資源機構吉野川局、財団法人吉野川水源地域対策基金、香川県水道局、四国中央市水道局、高松市水道局、高知市水道局、香川用土地利用改良区、社団法人四国建設弘済会、電源開発株式会社四国支社、四国電力株式会社高知支店、高知新聞社

◆日程◆

12:30 ○受付開始

総司会 KUTVテレビ高知 アナウンサー 和田敦

13:00 ○開会行事

・開会挨拶 早明浦湖水祭実行委員会副会長
・主催者挨拶 早明浦湖水祭実行委員会会長 土佐
・来賓祝辞

13:30 ○第一部:対談

テーマ 市場からみた食品開発
競争力のある商品づくりに挑む



高知大学国際・地域連携センター長
受田 浩之氏

コーライフ・クリエイション代表取締役社長
門田直明氏



14:15 ○第二部:パネルディスカッション

テーマ 嶺北産物を売り農村を守る
今、生産者に求められるものは

コーディネーター 受田浩之氏

オブザーバー 門田直明氏

パネリスト 大豊町 碁石茶生産組合
大豊町農業センター地域再生担当課長補佐 大石雅夫氏

JA土佐れいほく
米粉 販売マネージャー 長野 進氏

コープ自然派徳島
理事長 環 滋子氏

16:15 ○閉会行事 ・閉会挨拶 早明浦湖水祭実行委員会副会長

第26回大川村謝肉祭 (平成21年11月3日)



ウィンターカーニバル in 嶺北
(2009年12月5日)

冬の花火、見に来ませんか♡

ウィンターカーニバル in 嶺北

WINTER CARNIVAL 2009

お楽しみイベント

1200 開場
KOSUKE (出場券受付開始) はちきん地鍋汁
卓食い競争 (出場券受付開始) 無料サービス

12:30 オープニングセレモニー
楽屋立舞
よさこい乱舞
KOSUKE スポーツマックス
ステージパフォーマンス
卓食い競争
ダンスチーム
LIVE 文楽スタイル(パルコラス)
ジャンケン大会 (無料でもどなたでも参加OK)

1800 おたのしみ抽選会
アンケートを書いて抽選券をもらい
1900 キャンドルアート&花火
2000 終了

1200 開場
KOSUKE (出場券受付開始) はちきん地鍋汁
卓食い競争 (出場券受付開始) 無料サービス

12:30 オープニングセレモニー
楽屋立舞
よさこい乱舞
KOSUKE スポーツマックス
ステージパフォーマンス
卓食い競争
ダンスチーム
LIVE 文楽スタイル(パルコラス)
ジャンケン大会 (無料でもどなたでも参加OK)

1800 おたのしみ抽選会
アンケートを書いて抽選券をもらい
1900 キャンドルアート&花火
2000 終了

お楽しみ抽選会
スペシャル企画
特賞はA~D賞の中から選んでもらい、
クリスマスの日、又は指定日に特賞の
家にサンタクロースがお届けに
参ります。

キャンドルアート&花火

ゲームコーナー 多数出店
スタンプラリー 土佐アメリも
「道の駅大杉」「本山くらら市」道の駅土佐あめりらの
のうち2ヶ所のスタンプを集めると1枚、3ヶ所集めると3枚
ゲームコーナーで遊べる無料券がもらえます。会場で交換

12月5日(土) PM12:00~PM8:00
雨天決行 (天候等により一部内容が変更になる場合があります。)

場所: 吉野公園クライミングドーム
(高知県長岡郡本山町吉野 早明浦ダム直下)

主催: ウィンターカーニバル実行委員会 当日は場名が予告されますので記載内容をのりずに。
協賛: 大豊町・本山町・土佐町・大川村・本山町教育委員会・土佐町教育委員会・AA土佐れいほく 大豊町民会
本山町青年団・土佐町青年団・ 独立行政法人水資源機構高知総合管理事務所運営。高知分庁舎
高知新聞社・高知放送局・NHK高知放送局・KOSUKE・KOSUKE・KOSUKE・KOSUKE・KOSUKE・KOSUKE・KOSUKE
お問い合わせ: TEL: 0977-70-2001 (24時間受付) FAX: 0977-70-2002

6) コープ自然派・徳島

コープ自然派は、嶺北地域との交流や食材の仕入などに取り組んでいる。

2009年8月に嶺北で開催した「第29回早明浦湖水祭シンポジウム」では、玉木理事長がパネリストとして参加している。今後、食のツーリズムへの参加や食材確保で協力をお願いすることもできる。

事業概要 (2008年度末)

- 組合員数 10,446人 (前年対比 104.0%)
- 供給高 11億5,755万円 (前年対比 100.7%)
 - ポスティ 8億 800万円 (前年対比 101.0%)
 - 共同購入 3億2,514万円 (前年対比 99.8%)
- 福祉事業収入 8,989万円 (前年対比 99.8%)
- 経常剰余金 1,908万円 (前年対比 113.5%)
 - 供給事業部 1,770万円
 - 福祉事業部 138万円

所在地 〒771-0135 徳島県徳島市川内町平石若松204-6
 理事長 環 滋子
 専務理事 北岡 徹

はじめてボックス
 コープ自然派にご加入いただいた方へ、
 知ってほしい「違い」があります。

コープ自然派の有機野菜に対する取り組み。
 コープ自然派は、各地の有機農産物を認定しています。各地の有機農産物生産者グループが協力を結んで、ポスティやヨーグルトを産地、産直に直接仕入れ、検定を受けています。また、小売店に流通している「バイオフォーム」タイプの有機野菜も、生産者から直接仕入れ、検定を受けています。有機野菜が豊富で、おいしい「有機野菜の野菜づくりに取り組んでいます。今後も力を入れていくには、信頼性の高い認定、充実した品質(GAP)を確保し、他の有機農産物との違いを明確にしています。

有機野菜の「高い品質」と「低価格」を実現
 ●出荷を期し合う事で安定した品質・供給が可能です。
 ●生産者との信頼関係を築き、コスト削減を行います。
 ●最新の有機野菜ネットでご注文する事で、コスト削減が可能です。

毎日のお暮らしに欠かせない
コープ自然派「イチオシ」品を集めました。

まごころ牛乳 1000ml	まごころヨーグルト 90g×3	有機小麦粉 100g	もめん豆腐 300g	自然派ワッパン 150g
自然派コースアイス(生) 100g	じゃがいも 3個、にんじん2本、たまごむき2個	有機ほうれん草または小松菜 150g		

はじめてボックス初期利用で
宅配料無料期間が 8週間+4週間=12週間に延長!

1 注文用紙でのご注文
 2 インターネットでの注文
 3 電話でのご注文

新加入の組合員さんで、ご加入後から
8週間の方限定!
 コープ自然派 はじめてボックス
 注文番号 666664
 通常価格より **20%OFF** 1,724円 (税込)
 (送料別) 432円お得!

はじめてボックス!! 8週間の方限定!
 コープ自然派 お値打ち価格でご注文いただけます!
10% OFF

対象商品は 下記12品!!

下記12品が、商品券内(本スタ)でセール対象商品の場合、6セールの対象商品のセール率が10%以上の場合は、5%がはじめてボックスとして加算され、割引率は10%になります。
 6セールの対象商品のセール率が10%以上の場合はセール率が適用されます。

対象商品は 下記12品!!

まごころ牛乳	まごころヨーグルト	有機小麦粉	もめん豆腐	自然派ワッパン
自然派コースアイス(生)	じゃがいも 3個、にんじん2本、たまごむき2個	有機ほうれん草または小松菜		

コープ自然派は「こころ」を大切に
おすすめ 3つのポイント

- 1 商品案内に原材料表示
商品案内に原材料、産地を詳しく表示していますので、安心してご購入いただけます。
- 2 安全基準に高いハードル
商品を選ぶときは、農薬、殺菌剤まで従って、手取りまがけて確認の上で本当にいいと思ったものを選んでいただきます。
- 3 生産者と消費者を大切に
つくる人と食べる人の間の見える関係を大切にしています。

コープ自然派 活動事例の紹介

テーマ活動・チーム紹介

◎そよ風チーム

心地よいそよ風が、毎日の暮らしの中に爽やかに吹き抜けていくように！！「そよ風チーム」の願いです。その願いは、大人も子どもも、今も未来も変わることはありません。安心のその暮らしを邪魔するものは何？徳島県の山野を無残に埋め尽くした廃棄物（一般も、産廃も）。気づいた地域で気づいた人が真剣に取り組みたいと活動をしています。まずは、園瀬川流域問題からです。

◎石けんチーム

石けんチームは、生協発足当時から活動しています。廃油石けんプラントでの石けん作りや、使い方の学習会、エッセンシャルオイルを使った化粧水や石けん作りを通して、石けんの良さ組合員さんに伝えていきます。また、アトピーの講演会等を企画して、ライフスタイルの見直しを組合員さんに呼びかけています。

◎流域チーム

徳島の民意が示された第十堰の可動堰問題から吉野川に係っている。川は本来「そこに住む者が川とどう係ってきたか」が主眼であると考えます。去年は国交省に吉野川に関する意識アンケートを提出し、「流域住民の意見を聴く会」に積極的に参加提言した。吉野川を元気にできる方法は流域全域を視野に入れて活動している。

7/26（日） 吉野川ひがた教室〈流域チーム〉

ここにはテレビがありません。もちろんテレビゲームもありません。マンガ本もありません。そのかわり、干潟をわたる風の音や鳥や虫やカニたちや生きものたちの声があります。宇宙の深さや生命の一瞬の輝きを感じることができます。自然のなかで、様々な発見や驚きをいっぱい体験してください。

吉野川ひがた教室 (干潟観察と自由研究教室) 流域チーム

日時: 7月26日(日曜日) 12:30~17:00 小雨決行
場所: 吉野川河口干潟 集合 12:15 吉野川南堤グラウンド東詰
小学生以上(保護者同伴) 事前申し込み: コープ自然派 サービスセンター
TEL 0120-408-300
参加者は 帽子・タオル・長靴または汚れてもよい靴・飲み物

※申し込み締切 7月24日 17:30

案内人: 和田太一・井口利枝子(湿地学習コーディネーター)
住吉干潟で12:30~干潟観察のコツとテーマ選びのヒントを学びます
とくほ生協会会議室で15:00~室内学習会を行います。
参加費: 子ども500円・おとな500円

楽しい夏休み 目標をもってかえろう!
身近な自然を見なおしましょう!!
コープ自然派 徳島
※申し込みいただいた方には 流域チームから電話します。

14:56分が
小松島干潮
時刻です

7) NPO 法人 里山の風景をつくる会（ホームページより）

食のツーリズムでは、木材や家の部分は必ずしもテーマではないものの、仮に源流地域の森などについて、ツアーのプログラムに組み込まれるようになれば、関連の情報提供や商品販売などで連携の可能性がある。

里山の風景をつくる会とは

私たちは吉野川の環境を守る運動を進める中で上流の森の重要性を知りました。森から流れ出た水が川となり私たちの生活を潤し、やがて海へと帰っていく。この大きな循環の中で、私たちが生きていくことに改めて気がついたのです。日本の木材自給率は20%を切っています。山の木は使われないまま手入れもされず、日本の森は今まさに荒れ果てようとしています。保水力のある豊かな森を取り戻すため、流域に住む私たちにできることは、森の文化を蘇らせることではないでしょうか。私たちの住む町を流れる川の上流の森の木を使って家や家具をつくり、その良さを広めること。川上と川下がお互いに顔の見える関係でつながり、川上の人が育てた木を川下の私たちが使うシステムを築き上げることが重要です。私たちは吉野川の源流の森の木を使って里山の風景にふさわしい、素朴で力強い家や家具をつくります。それにより、私たちが地域と自然の営みの中でつながり、生きていくことを実感し、自然と人間の共生を意味する「里山」を復活させられると考えます。 事務局：〒770-8055 徳島市山城町東浜傍示 28-5

わたしたちのめざすこと

1. 吉野川源流の森の木で家や家具をつくり、木の文化を蘇らせます。
2. 自然素材を使った、人と環境にやさしいすまいをつくります。
3. 素朴で力強いデザインの「里山の家」をつくることにより美しい里山の風景を復活させます。
4. 林業家、製材所、工務店、設計事務所、住まい手がともに顔の見える関係で家づくりをします。

かしこい住まい手に

まちや住まい、風景についてセミナーやシンポジウムで学び、健康で安心して住める美しいまちをつくります。

木をつかおう

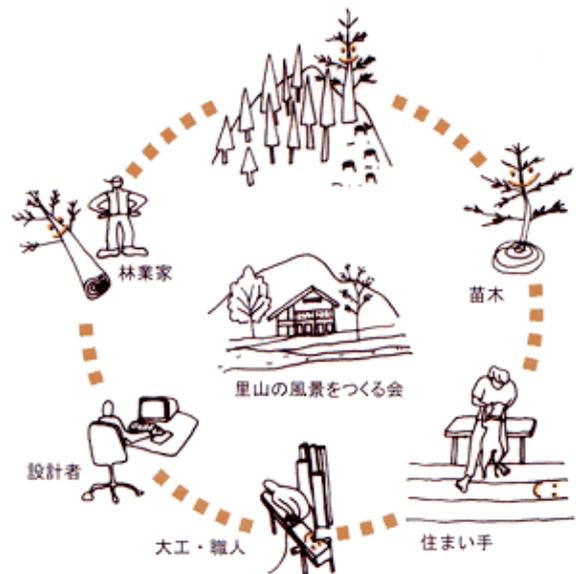
吉野川源流の森の木を使った「里山の家」「里山の家具」をつくることにより、森を保全し、緑のダムとしての機能を高めます。

森とまちをむすぶ

吉野川の上流・中流・下流の各地域で生活する人たちが森・川・海の自然循環の営みの中で生きていることを知りその輪を広げていきます。

〈里山の家具の販売〉

源流の森の木でつくられた家具のシリーズです。無垢の杉板でつくられた源流のかぐ。住まい手に合わせて時と共に成長する色合いや香りの変化をお楽しみ下さい。



源流ボックス

- (大) 幅 495 mm×奥行 270 mm×高 990 mm ¥5,775 (税込)
- (中) 幅 330 mm×奥行 270 mm×高 660 mm ¥3,675 (税込)
- (小) 幅 330 mm×奥行 270 mm×高 330 mm ¥2,100 (税込)

* 源流ボックスは組み立て式です。パーツでお送りしますので、楽しみながら組み立ててください。



源流杉のプランター (大・中)

・ 吉野川源流域の森の保全と、木材の有効利用を目的に、20～40年生の間伐材を使用しています。

・ 組み立て式 [7 ピース+ビス]

- 源流杉のプランター・大 ¥1,260

【サイズ】 L 540 × D 240 × H 200

【材質】 源流杉

- 源流杉のプランター・中 ¥945

【サイズ】 L 420 × D 200 × H 200

【材質】 源流杉



源流木's(キッズ) の楽しみ方

里山の積み木は、無塗装の白木です。

ですから、楽しみかたも、遊びかたも、いろいろ十色。

ここでは、3つのバージョンをご紹介します。

アバンギャルドな積み木です。従来の積み木にはない縞模様に幾何学模様が斬新です。

でも、どこか味わいがあるのが、素材の良さでしょう。



四国の森づくりフォーラム in とくしま

〈四国の森づくり徳島県実行委員会〉事務局：NPO里山の風景をつくる会内

里山の風景をつくる会では、「四国の森づくり徳島県実行委員会」を運営支援している。2009年10月に開催した森づくりフォーラムでは、嶺北地域の田岡氏をパネリストに招いている。

四国の森づくりフォーラム in とくしま
～森づくりから始めよう温暖化防止！未来に残そう美しい自然～

森づくり講演会・シンポジウム

2009年10月31日（土） 13:00 開演

会場：徳島県郷土文化会館〔あわぎんホール〕

□基調講演

「総ては繋がっている。」

立木 義浩 氏（フォトグラファー・美しい森づくり全国推進会議発起人）

□シンポジウム

「森の現状とNPO活動などの取り組み」

□パネルディスカッション

「森の再生・まちの復活」

*コーディネーター

野口政司（建築家・里山の風景をつくる会理事）

*パネリスト

- ・和田善行さん／TSウッドハウスと緑の列島ネットワークの活動（TSウッドハウス協同組合）
- ・田岡秀昭さん／れいほくスケルトンの取り組み（嶺北木材協同組合）
- ・橋本忠久さん／私の森づくりと林業（徳島県青年林業士）

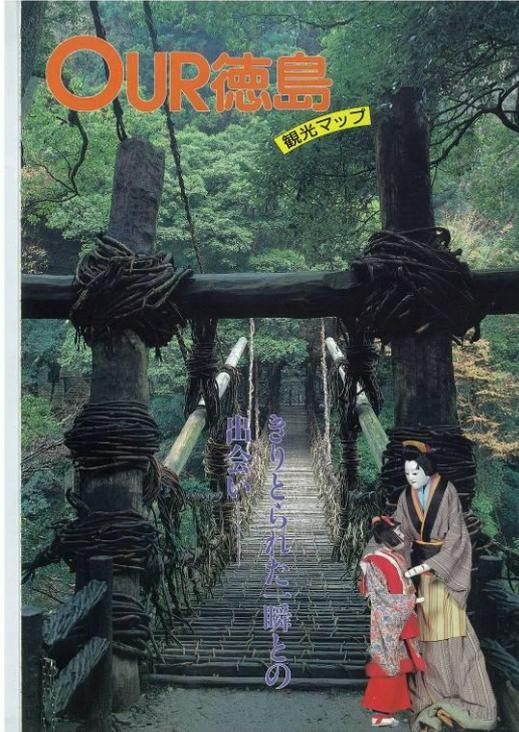
主催：四国の森づくり実行委員会（四国4県・四国森林管理局・四国の森づくり実行委員会）／四国の森づくり徳島県実行委員会／美しい森林づくり推進地方会議

8) 流域の観光ガイド

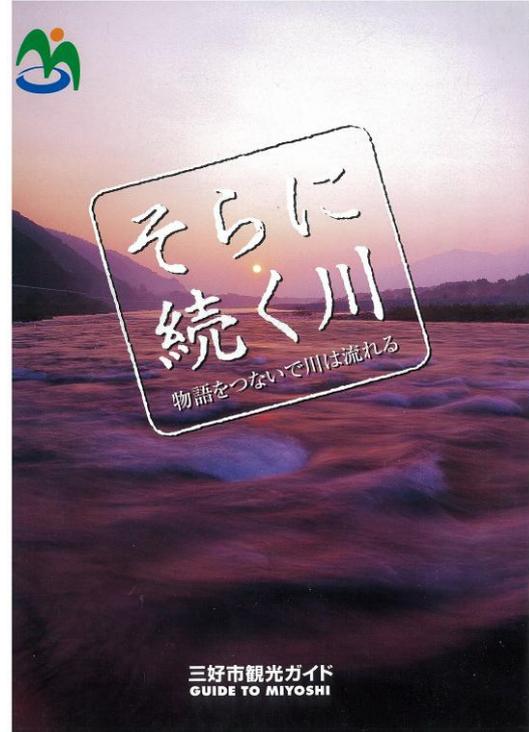
吉野川流域に関する観光ガイドやパンフレットには、以下のような者が出されている。これらの内容から、「食のツーリズム」に行かせそうな場所や地域資源を調査した。

祖谷溪周辺のマップ

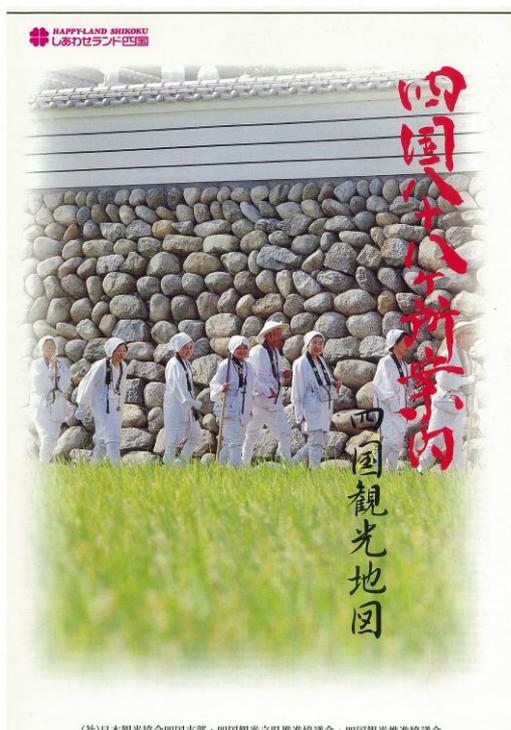
吉野川中流域のマップ



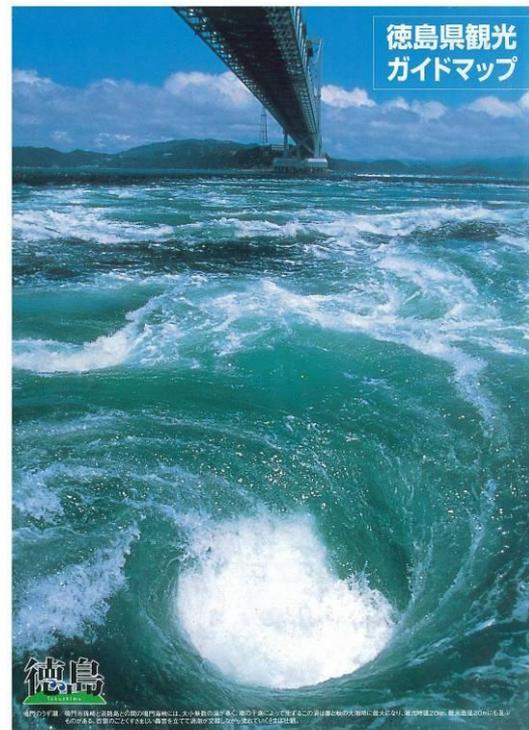
四国八十八カ所巡礼のマップ



鳴門周辺のマップ



(社)日本観光協会四国支部・四国観光立県推進協議会・四国観光推進協議会



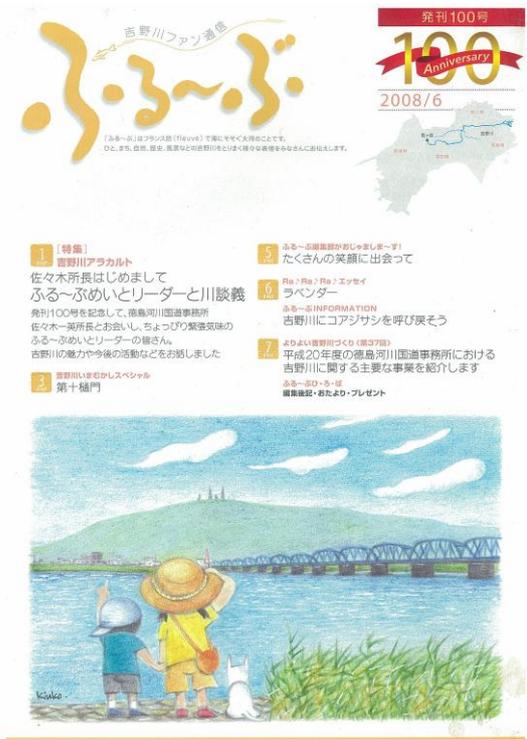
源流の山を巡るためのルート図



各種施設のパンフレット



吉野川に関する啓発パンフレット



手作りマップ



3. 食のツーリズムの検討

フィールドワークを通じて得られた地域情報を活かし、何度も訪れて繋がりを深めた人間関係を元に、具体的な食のツーリズム・ツアーの企画を検討した。

1) プログラムの構築までの企画のステップ

これまでの取り組みを踏まえ、食のツーリズムのプログラムをまとめた。ここで、プログラムを取りまとめるまでのステップを再整理する。

ステップ	項目	概要
ステップ1	地域の課題認識	良質な水資源の安定的な確保のためには、水源地域の活性化が必要である。この観点から、吉野川の水源地域である嶺北地域について、年ごとに厳しくなる地域の社会的状況を何とかするために、本調査に取り組むことになった。過去の経緯から、「嶺北地域」の活性化に取り組んできた「れいほくNPO」に焦点を当てた。
ステップ2	実態の把握	平成19年度の調査において、水源地域の活性化を図る上で、嶺北地域の現状と課題を把握した。嶺北地域の過疎化と高齢化が進行し、また市町村合併等の流れの中で、各町村の判断から嶺北広域行政事務組合の嶺北の地域づくりを考える企画セッションが解散されていたため、嶺北地域全体で活性化を推進する行政機能が弱まっていた。また、「れいほくNPO」も活動当初からのメンバーが高齢化する中で、嶺北地域だけで水源地域活性化を考えることに限界があった。 たとえ厳しい社会状況の中にあっても、嶺北地域では、従来から取り組んできた「れいほく八菜」「はちきん地鶏」「嶺北褐毛牛」など地域ブランド構築の努力が続いていた。
ステップ3	課題の絞り込みとテーマの設定	平成20年度に入り、前のステップの実態から数多くある課題の中で活性化に繋がる課題に絞り込んだ。具体的には、嶺北地域にある地域資源も含めて吉野川流域全体の地域資源を活かした「食のツーリズム」の形成に焦点を当てた。
ステップ4	構想の構築	食のツーリズムの形成にあたり、他の流域で経験を持つ（株）HAKKLの波佐本由香氏をプロデューサーとして、吉野川流域の人選を行った。具体的には、鳴門の漁師でそのしそとう実績から各界から評価の高い村公一氏をディレクターとして迎えた。波佐本氏、村氏の議論を通じて、具体的な食のツーリズムの骨格を整理していった。例えば、日帰りや1泊、2泊といった時間ごとに、どのようなツアー企画ができるかを検討した。

ステップ5	体制のセットアップ	実際に首都圏や関西圏からの来訪者を迎え入れることのできる食のツーリズムを展開する上で、吉野川流域でクオリティの高い食材やおもてなしを提供できる活動を把握した。その結果、東祖谷で活動している「ちいおりトラスト」と嶺北地域で活動している「有機のがっこう 土佐自然塾」の山下一穂氏たちとの連携を深めることとした。
ステップ6	地域情報の整理	体制を固めたことにより、それぞれの地域ごとに食のツーリズムのプログラムを構築するために必要な周辺地域の情報を収集してもらった。例えば、周辺の自然とふれあえる場所や地元料理を提供してくれる農家、地域を案内してくれる地域ガイドなどである。
ステップ7	計画立案	平成21年度は、食のツーリズムの事業化に向けた企画立案を行った。まず、これまでの情報を整理し、仮に1泊2日の行程を組んだ。ターゲットは、首都圏の食に関わる仕事を行っている人々や料理教室に通っているような食に関心の高い人々である。
ステップ8	食のツーリズムのストーリーの整理	食のツーリズムの来訪者にとって、吉野川流域の旅の楽しみは、地元の漁師や農家とのふれあいであり、普段の生活には全くない時間の楽しみ方である。これらの観点から、プログラムの時間の使い方には、従来のような観光とは異なる、ゆっくり時間を使うこと自体を商品の特徴とした。
ステップ9	食のツーリズム・ツアーの試行	関係者によって整理した食のツーリズムのツアーの行程を、実際に試行した。例えば、東祖谷のちいおり庵では、地元農家さんによる食事の提供をお願いした。
ステップ10	試行の結果、地域資源の評価	試行を通じて、いくつかの課題が確認できた。例えば、地元にとっておもてなししようとするのが過剰となって、必ずしも都会の人々にとっておもてなしにはならないようなケースがあった。また、ゆっくりとした行程で考えていたが、実際に嶺北地域の山を車で走ると、うねった路で車酔いが発生し、訪れる場所の削減や予想よりも移動時間の確保などが必要となった。このような小さな課題を一つずつ確認し、商品プログラムへの反映を行った。
ステップ11	事業化に向けた食のツーリズムの商品プログラム化への整理	試行によって得られた課題を踏まえ、あらためて関係者との議論を通じて、食のツーリズムの商品化に向けたプログラムの整理を行った。また、今後、食のツーリズムを推進していくための事業面からの体制を整理した。
ステップ12	営業展開	(株) HAKKL が中心となり、先に設定した食に関心のあるターゲットに向けて、食のツーリズムの営業をはじめた。平成22年度以降、徐々に事業を展開していく予定である。

2) 体制と役割分担

本プログラムの遂行は、下記団体の連携によって進められている。

役 割	担当とその主な内容
■プロジェクトのプロデュース	(株) HAKKL 食のツーリズム全体のプロデュースを行う。実際に事業化された場合、その窓口としての役割も果たす。
■プロジェクトのディレクション	漁師 村公一 食をテーマとしていることから、村氏の漁師としての考え方や人脈などを活かす。
■源流地域で有機野菜および遊び場所の提供	山下農園 食をテーマとしていることから、山下氏の有機農家としての考え方や人脈などを活かす。また、山下氏の農園など協力頂ける農家さんたちの協力を得て、来訪者が食材探しや農村の暮らしを他見するためのプログラムの受入を依頼する。
■源流地域で食文化体験プログラムの提供	ちいおりトラスト ちいおり庵を中心に、食文化や山村の暮らしを体験するためのプログラムの受入を依頼する。
■源流地域の人材コーディネート	NPO法人れいほく活性化機構 プログラムを進めていくために必要な地域の人材発掘やプログラムの現地の受入などを依頼する。

3) 食のツーリズム・ツアー企画

これまでの検討を踏まえ、食のツーリズム・ツアー企画の骨子は、下記のように整理した。

①食のツーリズムの基本コンセプト

これまでの検討と試行を踏まえ、食のツーリズムのコンセプトは以下のように整理した。

- ❖ タイトル「吉野川の源流・食の探訪・青空キッチン」

- ❖ テーマ： 「流域の旅」。吉野川源流の環境、源流が育んだ食材、源流が培った暮らしの文化を堪能する。
 - 漁師や農家と一緒に、下流から上流まで一緒に訪れる流域の旅とする。
 - 単に現地を見るのではなく、その土地にこだわって生きている人々と共に旅するから始めて見える本物の食材がある。目の前に集まった魚や農産物、畜産物に、訪れたシェフたちの心は躍のではないだろうか。
 - 迎える地域の人々は、都会から訪れる本物の食の技を楽しみ、これを契機とした相互の交流を誘発する企画とする。

- ❖ ターゲット
 - シェフ、料理人、料理教室の生徒など、料理に関心を持つ人々

- ❖ 旅の楽しみのポイント
 - 吉野川河口で漁をしているカリスマ漁師・村公一氏が、食のツアーをコーディネートする。(上下流の繋がり)
 - 東洋文化研究家アレックス・カーが有名にした茅葺き屋根の旧家のまわりで、自分の時間を楽しむ。
 - 農家さんたちとのふれあいを通じて、源流地域で暮らす知恵、農業・酪農へのこだわりを知る。

- ❖ プログラムのハイライト：
 - 自ら畑で食材を探し、自らの料理の技術で地物の食材を楽しむ。

②プログラム行程（1日目）

初日のプログラムは、主にちいおりトラストの協力を得て、東祖谷のちいおり庵を中心に山村の暮らしをゆったりした時間で楽しむプログラムを展開する。主なプログラムの行程は、以下の通りである。

- ◎ 徳島空港集合・出発 車移動
- ◎ 阿波池田駅着：ローカル線の旅体験
- ◎ 源流・東祖谷ちいおりトラスト着
 - 山の農家さんの食卓体験
 - 茅葺き屋根の囲炉裏のある暮らしの体験
 - 畑仕事、里山の散策
- ◎ 宿泊施設着

③プログラム行程（2日目）

2日目のプログラムは、主に山下農園と周辺の農家の協力を得て、嶺北地域で食材を楽しむプログラムを展開する。れいほくNPOには、例えば雨天時のプログラムの開催場所として、れいほくNPOの活動拠点などを活用させてもらおう。主なプログラムの行程は、以下の通りである。

青空キッチンの料理コンペは、ツアー参加者の顔ぶれや催行する季節によって臨機応変に変化させることができる。

- ◎ 宿泊施設発
- ◎ 源流・土佐町着
 - オープンキッチンの説明、チーム分け
 - 地元有機農家さんの畑から食材探し収穫
 - 水辺の散歩
 - 肉類（牛・豚・地鶏）は、地元業者手配
- ◎ 青空キッチン（雨天時は、れいほくNPO施設内）
 - 地元の食材を使った料理コンペ
 - 参加者全員で食の交流会
- ◎ 土佐町発
- ◎ 高知龍馬空港着 解散

4) 食のツーリズム・ツアー試案

関係者によって検討してきた食のツーリズム・ツアーの試案を示す。

「吉野川の源流・食の探訪・青空キッチン」

1泊2日の行程



❖ プログラム行程（1日目）

09:00 徳島空港集合・出発 車移動

11:00 阿波池田駅着：ローカル線の旅体験

阿波池田駅 11:22 発－大歩危駅 11:40 着 再び車移動



【コメント】吉野川の源流散策

吉野川の水と緑の豊かな環境は、四季ごとに様々な表情を見せます。途中、大歩危溪谷に係る吊り橋を歩いたり、運が良ければ川漁師から鮎やアマゴが手に入ります。これを携えて、茅葺き屋根の家に向かいます。自分たちで下ごしらえして囲炉裏で焼きます。

12:15 源流・東祖谷ちいおりトラスト着

（ちいおりトラスト・スタッフと農家さんがお出迎え）

○山の農家さんの食卓体験（蕎麦米雑炊、芋串焼きほか）

○茅葺き屋根の囲炉裏のある暮らしの体験（薪割り、火おこし、など）

○畑仕事、里山の散策



【コメント】茅葺きの家 囲炉裏端

祖谷溪にも数少なくなった茅葺きの家です。アレックス・カーが中心となって保存活動を進めています。静かに煙立ち上る囲炉裏のたもとで、焼いた地芋を食べたり、書をたしなんだり、縁側で寝ころんだり、思い思いの時間を過ごしてもらいます。



【コメント】源流の暮らし体験

山々の連なる源流の地は、心地よい風が通りすぎます。斜面の畑を散策しながら、アンデスの原種に似た味の地元の馬鈴薯の収穫を行います（季節限定）。茅葺きの家のみわりでは、薪割りを体験し、薪で湧かしたお風呂で汗を流します。



18:00 宿泊施設着

❖ プログラム行程（2日目）

08:00 宿泊施設発

10:00 源流・土佐町着（有機農家さん、れいほくNPOがお出迎え）

○オープンキッチンの説明、チーム分け

○地元有機農家さんの畑から食材探し収穫

○水辺の散歩

○肉類（牛・豚・地鶏）は、地元業者手配



【コメント】 有機野菜の畑の収穫

ツアー主催者からツアー参加者に、青空キッチンの「本日のテーマ」を出します。ツアー参加者は、大地を市場に見立てて、自ら畑の中から食材を選んできます。農家さんに手伝ってもらい、野菜の特徴やこだわりなどを聞きながら丁寧に収穫を済ませば、青空キッチンの準備完了です。



【コメント】こだわりの食材見学
この地域には、酪農家が赤みのうまさにこだわって育てている「土佐褐毛牛」、養鶏家が新たな地域の食材として頑張っている「はちきん地鶏」などがあります。ツアー参加者は、牧場を訪ね、酪農の世酔を見学します。これらの食材はあらかじめ地元の流通業者に準備してもらいます。



12:00 青空キッチン（雨天時は、れいほくNPO施設内）

○地元の食材を使った料理コンペ
（テーマ例：野菜が美味しいスパゲティ）

○参加者全員で食の交流会（地元住民も参加）



【コメント】青空キッチン

自分たちで選んだ食材を、「本日のテーマ」で自ら料理します。美味しい水、美味しい空気、元気な野菜、滋味豊かな食材を、プロたちの技で、美味しい一皿に仕立てます。お互いの料理を品評しながらみんなで楽しめます。これらの食材は、ツアーの参加を通じて、参加者が気に入れば、その後の商取引にも発展させていきます。

15:00 土佐町発

16:30 高知龍馬空港着 解散

5) 催行の予定

実際の催行に当たっては、より詳細な調整が必要であるが、現時点の体制と目安としての催行原価は、以下のように予定している。

【主催】 株式会社 HAKKL
東京都港区南青山 2-4-15

【企画運営体制】

企画の運営に当たっては、下記の体制で臨む。

- ① (株) HAKKL /プロジェクトのプロデュース
- ② 漁師 村公一 /プロジェクトのディレクション
- ③ 山下農園 /源流地域で有機野菜および遊び場所の提供
- ④ 簾庵トラスト /源流地域で食文化体験プログラムの提供
- ⑤ NPO法人れいほく活性化機構 /源流地域の人材コーディネーター

【催行原価】

催行の原価は、概ね下記のような金額である。

交通費については、季節変動と航空運賃等の種類によって大きく異なる。

これらの基本的な経費に、実際のプログラムに係る各種経費を積み上げて販売価格とする。

(大人1名)

現地の場合 約 25,500 円

東京発の場合 約 55,500 円

大阪の場合 約 42,500 円

交通費：8,000 円観光タクシー利用（一部JR土讃線を利用）

東京発着は+約 30,000 円 大阪発着は+約 17,000 円

宿泊費：8,000 円（1泊夕・朝食込）

プログラム参加費： 昼食代・2,000 円 夕食代・1,500 円

コーディネーター代・6,000 円

第5章 今後の展開

1. プロジェクトの成果・課題と今後の展開

吉野川流域において、平成19年度から21年度にかけて取り組んできた流域が一体となった水源地域の活性化は、流域の起業意識の高い人々によりツアーの事業性を詰める段階まで進めることができた。

- ❖ これまでの吉野川流域の水源地域活性化は、嶺北地域に焦点を当てた取り組みだった。今回の取り組みは、下流域はもとより、中流域（祖谷溪）の人々も参画した活動を進めた。
- ❖ NPOが中心となると、経済的な自律性の弱さがつきまとう。今回の取り組みは、最初から経済活動を目的とし、事業主体として参画できる人材を中心に取り組むことで、調査終了後も、自立的な活動を見込むことができる。
- ❖ 今後の食のツーリズムの発展において、東京や大阪からの交通アプローチを考えると、高知（海側）もツアーに組み込む必要がある。魅力あるツアー企画とするためには、吉野川流域をクローズアップしつつも、プログラム内容は、より多面的な楽しみを組み込む必要がある。
- ❖ 平成22年度には、ツアーのプログラムを実際に事業として進め、徐々に内容を進化させる。



2. 今後の課題 ～さらなる活性化の促進のために～

この3カ年のプロジェクトは、行政の直接的関与がほとんど無い中で進めてきた。このため、NPO などの人伝で人材を捜しながら、その人人が自らの出来ることに取り組み、人と人をつなげる活動によって推進した。この流れを、さらに発展させるためには、以下のような課題に取り組んでいく必要がある。

- ❖ 他の元気な流域に比べ、来訪者へのおもてなしのクオリティが弱いため、宿泊関係者向け、販売関係者向けに外部講師を招いた実践的な人材育成が必要である。

- ❖ 地元関係者だけでは広域的な連携による旅行商品企画が立てられず、目の肥えている首都圏には魅力が感じられない。このため、専門家によるモニターツアーの受け入れを通じた継続的な地元ネットワークの形成促進が必要である。(例えば、観光客向けの地域交通の多面的利用の研究など)

- ❖ 嶺北地域と徳島・高松のNPOなどの交流には長い歴史があるものの、吉野川流域のその他地域（特に中流域）の参画が弱いため、吉野川流域全体として首都圏などに発信する力が弱い。今後、上・下流だけでなく、中流域の参画を促す機会が必要である。

- ❖ 地元産品を大都市マーケット（首都圏・アジア）に売り込んでいくために必要な流通経費の支援や削減のための研究費用等の支援が必要である。

- ❖ 吉野川流域内の特産品の情報収集を行ったり、旅行企画商品を誘発したりするための地元の社会起業家への活動支援が必要である。

■(財)吉野川水源地域対策基金との連携

- ❖ (財)吉野川水源地域対策基金は、吉野川水系におけるダム建設等の治水及び利水のための諸施策に伴い必要となる、水没関係住民の生活再建対策並びに水没関係地域の振興、整備等のための資金の援助、調査研究等を行うとともに、関係地域の相互理解及び交流の促進等を行うことにより、吉野川水系における治水及び利水のための諸施策の推進、水没関係住民の生活の安定及び水没関係地域の振興を図り、もって流域関係地域の振興と一体的発展に資すること。以上の目的のために設立された組織である。
- ❖ 事業内容は主に以下の2つである。
 - 交流促進事業・・・流域関係地域の相互理解及び交流促進に関する事業（交流促進事業） 例えば、早明浦湖水祭：水神祭・シンポジウム・子ども交歓会（高松市と嶺北地域の子どもの対象）
 - 早明浦ダム事業・・・早明浦ダムに係る水源地域の振興及び整備に関する事業 事業内容：施設整備、環境整備、水源地の森整備事業等 12 事業
- ❖ その活動の対象地域は、嶺北地域を構成する本山町、大豊町、土佐町、大川村、いの町（旧本川村）である。
- ❖ 吉野川水源地域対策基金では、今後の吉野川流域の活性化に繋がる取り組みとして、観光の促進につながる支援を検討している。例えば、今回の旅のツーリズムに関連する事項としては、旅行者が活用できそうな流域のマップづくりや、吉野川流域の地域の魅力を対外的にプロモーションしていくことである。
- ❖ 平成 22 年度以降、このような支援を進めていくことと、本調査で試行している食のツーリズムを連携させていくことによる吉野川流域の活性化が期待されている。

おわりに

過去3カ年にわたり、流域一体化による水源地域の活性化を目指して調査を進めてきた。この間、水源地域および流域を取り巻く課題をマクロな視点で捉え、また、これらに関わる人々をミクロな視点で捉えてきた。

そして、今後の社会に必要な「流域一体化による水源地域の活性化」というベクトルに適う行動計画を構築し、まずはじめの一步を踏み出した。

この一步は、今後持続的なものとするのが目的である。このためには、活動が徐々に広がり、深まるようなステップを持つことである。それは、活動を行う担い手が新しい展開をし続けることに限らず、社会がこのような活動に注目し評価し、さらには経済的に支えていくことでもある。

このような循環を形成することが持続的な進化につながるものと考えている。

平成 21 年度
水源地域活性化調査 報告書

平成 22 年 3 月

発行：国土交通省土地・水資源局 水資源部
水源地域対策課
東京都千代田区霞が関 2-1-2

調査担当：パシフィックコンサルタンツ株式会社
情報事業本部 地域環境システム部
東京都多摩市関戸 1-7-5
